

## 平成14年度 市内遺跡発掘調査に伴う 埋蔵文化財発掘調査報告書

*Imaino*

今井野遺跡(第10次)

*Nonakada*

浜町野中田地点

*Nobeokajyonai*

延岡城内遺跡(第8次)

*Kitakouji*

北小路遺跡

*Shimogai*

下貝遺跡

*Kurotsutida*

黒土田遺跡(第3次)

*Kurotsutida*

黒土田遺跡(第4次)

*Nobeokajyonai*

延岡城内遺跡(第9次)

*Oniguro*

鬼黒遺跡

*Gonjiro*

別府町権次郎地点(第2次)

*Kumata*

高野町熊田地点

*Kamitataro*

上多々良箱式石棺群(第3次)

## 序 文

延岡市は宮崎県の北部に位置し、人口約12万4千人の中核都市として、県内随一、東九州地域においても有数の工業集積地であります。その一方では豊かな自然と歴史を併せ持った都市であります。近年は、産業の停滞・人口の減少・高齢化が市の抱える大きな課題となっています。

しかし、県北地域の大きなネックとなっていた道路問題が、国道10号延岡道路の着手や国道218号北方延岡道路の着手など、高速道路建設に大きな拍車がかかり、これらに伴い市内でもインターへのアクセス道路の整備が進んでおります。

念願であった4年制大学「九州保健福祉大学」も開学後4年目を迎え、さらには新しい学部を創設するなど着実に進展を見せております。

こうした地域振興を背景に、大規模な公共工事や民間開発が増加しています。このような状況に対応するため、市教育委員会では開発事業等の計画に際して、埋蔵文化財の確認調査等を実施しており、本書はその報告書であります。

本書が埋蔵文化財への理解を深める一助となることを願うとともに、研究資料としてご活用いただければ幸いです。

最後になりますが、発掘調査にあたり県教育委員会文化課をはじめ、地権者の方々にご協力得ました。記して感謝いたします。

平成15年3月31日

延岡市教育委員会

教育長 牧野哲久

## 例 言

1. 本書は延岡市教育委員会が国・県補助を受けて、平成14年度に実施した市内遺跡発掘調査報告書である。
  2. 本年度は黒土田遺跡(第1次)、延岡城内遺跡(第9次)、鬼黒遺跡、別府町権次郎地点(第2次)、高野町熊田地点、上多々良箱式石棺群(第3次)の発掘調査を実施した。
  3. 本書に使用した遺構・遺物の実測・トレース・図面作成は、山田 聰、尾方農一、高浦 哲、敷石サヨ子、藤本千鳥、森 有美、山本敬子が行った。
  4. 現場での写真撮影は各調査担当者が、遺物の写真撮影は尾方、高浦が行った。
  5. 方位は磁北を示し、本書に使用したレベルはすべて海拔高である。
  6. 出土遺物は内藤記念館で保管しており、今後展示公開の予定である。



Fig. 1 延岡市位置図

## 本文目次

第Ⅰ章 はじめに

## 1. はじめに ..... 1~2

## 第二章 調査の記録

1. 今井野遺跡(第10次).....	3~20	2. 浜町字野中田地点 .....	21~23
3. 延岡城内遺跡(第8次).....	24~34	4. 北小路遺跡 .....	35~37
5. 下貝遺跡 .....	38	6. 黒土川遺跡(第3次) .....	39~47
7. 黒土川遺跡(第4次).....	48~54	8. 延岡城内遺跡(第9次) .....	55~62
9. 鬼石遺跡 .....	63~64	10. 別府市蛭次郎地点(第2次) .....	65
11. 高野町熊田地点 .....	66~67		

## 挿図目次

Fig. 1	延岡市位置図	Fig. 2	平成14年度市内遺跡発掘調査地分布図	2
Fig. 3	今井野遺跡(第10次)位置図及び周辺遺跡	Fig. 4	今井野遺跡(第10次)調査区及び周辺調査位置図	3
Fig. 5	今井野遺跡(第10次)基本上層図	Fig. 6	今井野遺跡(第10次)グリッド配置図	4
Fig. 7	今井野遺跡(第10次)集石1号実測図	Fig. 8	今井野遺跡(第10次)集石1号・7号実測図	5
Fig. 9	今井野遺跡(第10次)出土遺物実測図1	Fig. 10	今井野遺跡(第10次)出土遺物実測図2	7
Fig. 11	今井野遺跡(第10次)出土遺物実測図3	Fig. 12	今井野遺跡(第10次)出土遺物実測図4	8
Fig. 13	今井野遺跡(第10次)出土遺物実測図5	Fig. 14	今井野遺跡(第10次)出土遺物実測図6	10
Fig. 15	今井野遺跡(第10次)出土遺物実測図7	Fig. 16	今井野遺跡(第10次)出土遺物実測図8	12
Fig. 17	今井野遺跡(第10次)出土遺物実測図9	Fig. 18	今井野遺跡(第10次)出土遺物実測図10	15
Fig. 19	今井野遺跡(第10次)出土遺物実測図11	Fig. 20	浜町野中田地点位置図	21
Fig. 21	浜町野中田地点調査区配置図	Fig. 22	浜町野中田地点1・2・4・6トレンチ上層断面図	22
Fig. 23	延岡城内遺跡(第8次)位置図	Fig. 24	延岡城内遺跡(第8次)調査区配置図	25
Fig. 25	延岡城内遺跡(第8次)・2トレンチ上層断面図	Fig. 26	延岡城内遺跡(第8次)東地区山崩帶分布図	27
Fig. 27	延岡城内遺跡(第8次)出土遺物実測図1	Fig. 28	延岡城内遺跡(第8次)出土遺物実測図2	29
Fig. 29	延岡城内遺跡(第8次)出土遺物実測図3	Fig. 30	延岡城内遺跡(第8次)出土遺物実測図4	31

Fig.31	北小路遺跡位置図	35	Fig.32	北小路遺跡調査区配図	35
Fig.33	北小路遺跡排水溝横断面図	36	Fig.34	北小路遺跡排水溝横断面図	36
Fig.35	北小路遺跡出土遺物実測図	37	Fig.36	下貝遺跡位置図	38
Fig.37	下貝遺跡調査区配置図	38	Fig.38	黒土田遺跡(第3次)位置図	39
Fig.39	黒土田遺跡(第3次)調査区配置図	40	Fig.40	黒土田遺跡(第3次)検出遺物分布図	41
Fig.41	黒土田遺跡(第3次)十層断面図	42	Fig.42	黒土田遺跡(第3次)集石造構1実測図	43
Fig.43	黒土田遺跡(第3次)出土遺物実測図1	44	Fig.44	黒土田遺跡(第3次)出土遺物実測図2	45
Fig.45	黒土田遺跡(第3次)出土遺物実測図3	47	Fig.46	黒土田遺跡(第4次)位置図	48
Fig.47	黒土田遺跡(第4次)調査区位置図	48	Fig.48	黒土田遺跡(第4次)基本十層図	49
Fig.49	黒土田遺跡(第4次)出土遺物実測図1	50	Fig.50	黒土田遺跡(第4次)出土遺物火薬洞2	51
Fig.51	黒土田遺跡(第4次)出土遺物実測図3	52	Fig.52	黒土田遺跡(第4次)出土遺物実測図4	53
Fig.53	延岡城内遺跡(第9次)位置図	55	Fig.54	延岡城内遺跡(第9次)調査区配置図	56
Fig.55	延岡城内遺跡(第9次)T4検出内地実測図	57	Fig.56	延岡城内遺跡(第9次)T1・T2東壁上層断面図	58
Fig.57	延岡城内遺跡(第9次)出土遺物実測図1	59	Fig.58	延岡城内遺跡(第9次)出土遺物実測図2	60
Fig.59	鬼黒遺跡位置図	63	Fig.60	鬼黒遺跡基本土層図	63
Fig.61	鬼黒遺跡調査区配置図	64	Fig.62	南方古墳群第16号埴輪測量図	64
Fig.63	別府町樺次郎地点(第2次)位置図	65	Fig.64	別府町樺次郎地点(第2次)調査区配置図	65
Fig.65	高野町熊川地点位置図	66	Fig.66	高野町熊川地点調査区配置図	66
Fig.67	高野町熊川地点トレンチ土層断面図	67			

## 表 目 次

第1表	平成14年度市内遺跡発掘調査地一覧表	1	第2表	今井野遺跡(第10次)主要遺物觀察表1(旧石器)	17
第3表	今井野遺跡(第10次)主要遺物觀察表2(旧石器)	18	表4表	延岡城内遺跡(第8次)出土遺物觀察表	34
表5表	黒土田遺跡(第3次)出土遺物觀察表 右器	46	表6表	黒土田遺跡(第3次)出土遺物觀察表 左器・須恵器・陶磁器	47
第7表	延岡城内遺跡(第9次)出土遺物觀察表	61	第8表	報告書抄録	68~69

## 写 真 図 版 目 次

PL. 1	今井野遺跡(第10次)調査風景	16	PL. 2	今井野遺跡(第10次)集石10号	16
PL. 3	今井野遺跡(第10次)集石1号	16	PL. 4	今井野遺跡(第10次)集石7号	16
PL. 5	今井野遺跡(第10次)出土遺物1	18	PL. 6	今井野遺跡(第10次)出土遺物2	19
PL. 7	今井野遺跡(第10次)出土遺物3	19	PL. 8	今井野遺跡(第10次)出土遺物4	20
PL. 9	今井野遺跡(第10次)出土遺物5	20	PL. 10	浜町野中川地点調査地	21
PL.11	浜町野中田地点4トレンチ上層断面	23	PL. 12	浜町野中田地点4トレンチ上層断面	23
PL.13	浜町野中田地点6トレンチ上層断面	23	PL. 14	延岡城下ノ1(18世紀後半~19世紀)	24
PL.15	日向国延岡城石垣並十匝破損之穴(嘉永5年・1852)	24	PL. 16	延岡城内遺跡(第8次)周辺航空写真(1990年)	25
PL.17	延岡城内遺跡(第8次)調査地	25	PL. 18	延岡城内遺跡(第8次)トレンチ十層断面	26
PL.19	延岡城内遺跡(第8次)東区右塔検出状況	27	PL. 20	延岡城内遺跡(第8次)東区右塔検出状況1	28
PL.21	延岡城内遺跡(第8次)東区右塔検出状況2	28	PL. 22	延岡城内遺跡(第8次)出土遺物1 石器	28
PL.23	延岡城内遺跡(第8次)出土遺物2-1 陶器・青銅製品	33	PL. 24	延岡城内遺跡(第8次)出土遺物2-2 陶器・青銅製品	33
PL.25	延岡城内遺跡(第8次)出土遺物3 陶器	33	PL. 26	延岡城内遺跡(第8次)出土遺物4 磁器	33
PL.27	延岡城内遺跡(第8次)出土遺物5-1 磁器	33	PL. 28	延岡城内遺跡(第8次)出土遺物5-2 磁器	33

PL.29	延岡城内遺跡(第8次)出土遺物6 陶器・土製品	33
PL.31	北小路遺跡調査風景	35
PL.33	北小路遺跡出土遺物	37
PL.35	黒土川遺跡(第3次)発査地	39
PL.37	黒土田遺跡(第3次)土層断面	40
PL.39	黒上田遺跡(第3次)調査風景	41
PL.41	黒土川遺跡(第3次)集石遺構半跡状況	43
PL.43	黒土田遺跡(第3次)集石遺構充填状況	43
PL.45	黒上田遺跡(第3次)出土遺物2	46
PL.47	黒土川遺跡(第4次)出土遺物1	54
PL.49	口向国延岡城石垣直塗渡之観	55
PL.51	延岡城内遺跡(第9次)トレンチ1土層断面	58
PL.53	延岡城内遺跡(第9次)トレンチ4石垣検出状況	58
PL.55	延岡城内遺跡(第9次)出土遺物(鉢類)	62
PL.57	南方古墳群第16号墳近景	64
PL.59	高野町熊川地点調査地(1トレンチ)	66
PL.61	高野町熊田地点調査地(2トレンチ)	67
PL.30	延岡城内遺跡(第8次)出土遺物7 ガラス器	33
PL.32	北小路遺跡排水遺構検出状況	36
PL.34	下只遺跡調査風景	38
PL.36	黒土川遺跡(第3次)表土剥ぎ後	39
PL.38	黒上田遺跡(第3次)遺構検出状況	41
PL.40	黒土田遺跡(第3次)集石遺構検出状況	43
PL.42	黒土川遺跡(第3次)集石遺構配石検出状況	43
PL.44	黒上田遺跡(第3次)出土遺物1	46
PL.46	黒土田遺跡(第4次)土層堆積状況	48
PL.48	黒土川遺跡(第4次)出土遺物	54
PL.50	延岡城内遺跡(第5次)検出内堀空手の真	55
PL.52	延岡城内遺跡(第9次)トレンチ2土層断面	58
PL.54	延岡城内遺跡(第9次)トレンチ5内堀検出状況	58
PL.56	延岡城内遺跡(第9次)出土遺物(立面)	62
PL.58	削府町櫻次郎地点(第2次)調査地	65
PL.60	高野町熊川地点1トレンチ上層断面	67
PL.62	高野町熊田地点2トレンチ土層断面	67

# 第Ⅰ章 はじめに

## 1. はじめに

延岡市は、日向灘に面した宮崎県の北部に位置し、東経 131 度 32 分 45 秒～131 度 50 分 20 秒、北緯 32 度 43 分 32 秒～32 度 29 分 11 秒の間にあり、面積は 283.82km である。人口は 12 万 4 千人を数え、宮崎県北部の中核都市であり、また県下最大の工業集積地である。

これまで工業都市として認識してきた本市であるが、「内藤家伝來の能面展」や「のべおか天下一薪能」、「城山かぐら祭」等を開催し、全国に文化都市「のべおか」を情報発信している。

現在の延岡市は、念願だった 4 年制大学「九州保健福祉大学」が開学 4 年目を迎え、さらに薬学部の新設を計画、「国道 10 号延岡道路」の着手、「国道 218 号北方延岡道路」など、これまでの大規模な課題であった道路問題に対しても大きく前進している。このような背景のなか、公共・民間を問わず開発事業が増加し、それに伴い埋蔵文化財の調査も増加している。

今年度の調査は公共事業に伴う調査が主で、開発事業と埋蔵文化財保護との調整資料を得るために下記の 6箇所で確認・試掘調査を実施した。今年度の報告書は、昨年度に調査し次年度報告とした、今井野遺跡(10 次)、浜町野中田地点、延岡城内遺跡(8 次)、北小路遺跡、下貝遺跡、黒土田遺跡(3 次)を巻頭に報告する。また、上多々良箱式石棺群(3 次)は年度末調査のため次年度報告とする。

遺跡名	所在地(延岡市)	調査原因	調査面積	調査期間
黒土田遺跡(第4次)	細見町字黒土田	宅地造成	40.0m <sup>2</sup>	平成14年 8月19日～8月27日
延岡城内遺跡(第9次)	本小路字本小路	保存整備	115.5m <sup>2</sup>	平成14年 8月19日～9月 5日
鬼黒遺跡	天下町字鬼黒	堆肥舎建設	25.6m <sup>2</sup>	平成14年 8月28日～9月 5日
別府町権次郎地点(第2次)	別府町字権次郎	宅地造成	44.8m <sup>2</sup>	平成14年 9月25日～9月27日
高野町熊山地点	高野町字熊山	広域農道建設	17.0m <sup>2</sup>	平成14年10月28日～11月 8日
上多々良箱式石棺群(第3次)	占川町字上多々良	区画整理事業	32.6m <sup>2</sup>	平成15年 3月 3日～3月24日

第1表 平成14年度 市内遺跡発掘調査地一覧表

## 2. 調査の組織

調査主体	延岡市教育委員会		
教育長	牧野哲久		
文化課長	酒井修平		
課長補佐兼文化振興係長	黒木育朗		
文化財係長	原岡秀樹		

庶務担当	文化課主査	稻田芳子
------	-------	------

調査担当	文化課主任主事	山田聰
	文化課主任主事	尾方農一
	文化課主事	高浦哲

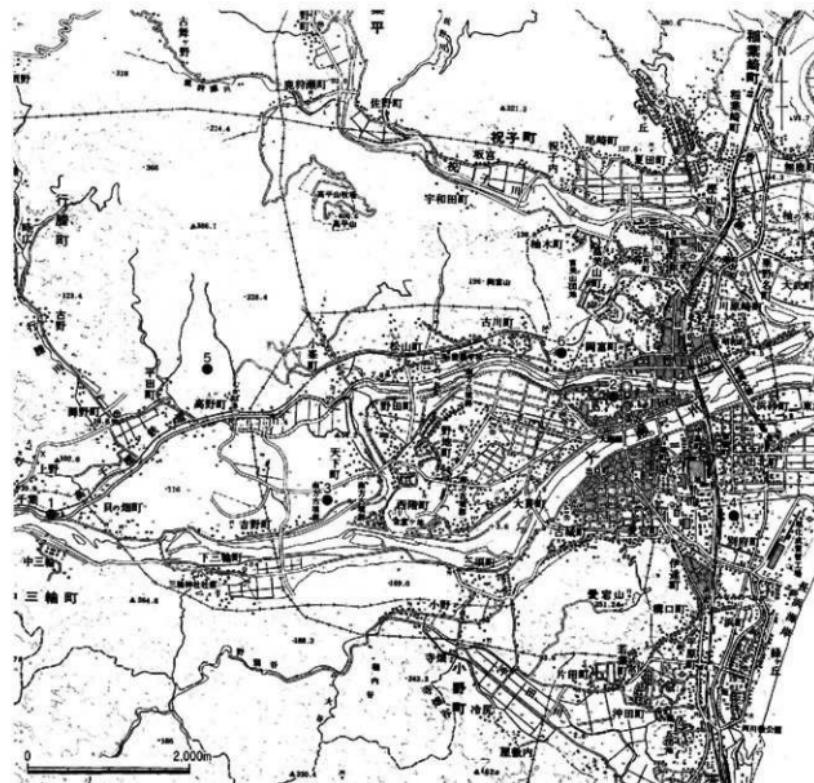
発掘作業員

安藤登美子、稻垣広宣、稻垣裕司、甲斐カツキ、甲斐三千代、甲斐如高、稼農末治、河野裕明、久保利男、酒井清子、酒井正志、中岩房子、中川イツ子、林田裕子、松崎辰磨、松田勝美、山本亮二

資料整理

敷石サヨ子、藤本千鳥、森 有美、山本敬子

発掘調査の事前協議等において、市街路公園課、市農林課、市農村整備課、市区画整理課に御協力をいただいた。また、土地所有者及び関係者の宮崎北部森林管理署、共栄工務店、鶴日向総合建設の方々には、調査の課程において便宜をはかっていただいた。記して感謝します。



1. 黒土田遺跡（第4次） 2. 延岡城内遺跡（第9次） 3. 鬼黒遺跡  
4. 別府町権次郎地点（第2次） 5. 高野町熊田地点 6. 上多々良箱式石棺群（第3次）

Fig.2 平成14年度市内遺跡発掘調査地分布図 (1/60,000)

## 第II章 調査の記録

### 1. 今井野遺跡(第10次)

所在地 延岡市天下町 1213 番 451 外  
調査原因 宅地造成  
調査期間 20010416 ~ 20010628

調査面積 353.0 m<sup>2</sup>  
担当者 高浦  
処置 調査後破壊

#### (1) 位置と環境

当遺跡は、市の西南部に位置し五ヶ瀬川と行藤川に挟まれた標高約40mの台地上に立地し、道路を挟んだ南には延岡市植物園が位置している。当遺跡はこの台地の最端に立地している。遺跡の周辺には、舞野町に市の先土器時代を代表する赤木遺跡、高野町には高野貝塚(時期不明)、遺跡の東約180mには国指定南方古墳群第11~13号墳が点在している。

この台地は近年開発が数多く計画され、それに伴い発掘調査が多く実施されている地域である。平成元年度に実施された、市道高野天下線道路改良工事に伴う発掘調査(1次調査)では、縄文時代早期の集石遺構、押型文土器、石器等や、弥生後期の土器が確認されている。同じく平成5年の2次調査では、



Fig.3 今井野遺跡(第10次)位置図及び周辺遺跡  
(1/15,000)  
1. 今井野遺跡 2. 南方古墳群第11~13号  
3. 長谷遺跡

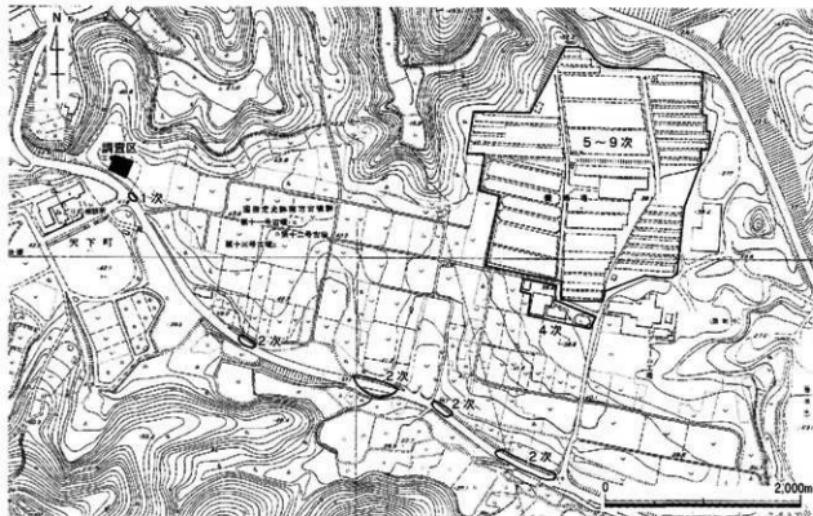


Fig.4 今井野遺跡(第10次)調査区及び周辺調査位置図 (1/5,000)

古墳時代の住居址、中世の溝が検出されている。遺跡の東 550m は、平成 10 年度に工業団地造成に伴う確認調査（9 次調査）を実施し、旧石器時代の遺物の出土が確認されている。

また遺跡周辺に残する過去の記録も数多く残っており、大正から昭和にかけて当時教員をしていた行馬七蔵により弥生土器、打製石器、石鏃、須恵器等の遺物採集がされている。その他「延岡市史」や「延岡附近神代遺蹟と傳説」でも、数多くの遺構・遺物の存在を示唆している。

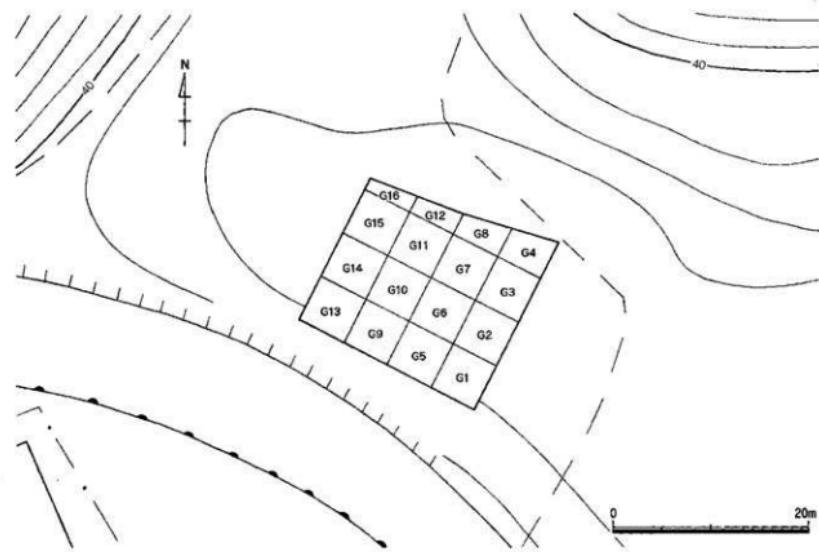
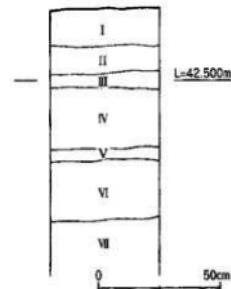
調査地は、1 次調査が実施された地点の北側にあたり、以前は植物園の育苗地として耕作が行われていた。

## (2) 調査の概要

調査は造成に伴う切り土工を行う約 353 m<sup>2</sup>を対象とした。調査はグリッド法を採用し、5m × 5m のグリッドを設定した。グリッドは南東から北に向かい個別に G1、G2 … G16 とした。調査地は事前のトレーニングから 7 層（耕作土除く）が確認でき、アカホヤ火山灰層は既に消失していることが確認できた。調査は重機により擾乱を受けている耕作土除去から開始した。

本遺跡の基本層序は次のとおりである。I - 黒褐色土、II - 暗褐色粘質土（漸移層）、III - 茶褐色土（褐色ローム）、IV - 暗茶褐色土（上位白斑ローム）、V - 黄褐色土（始良丹沢火山灰）、VI - 黒褐色土（白斑ローム）、VII - 黄褐色粘質土。

I ~ II 層が縄文早期、III ~ VI 層が旧石器時代の包含層である。



(3) 検出遺構

旧石器時代

10号集石

G 6 の南西に位置し、Ⅲ層上位から検出された。掘込みは最径 94 cm、最深 30 cm の円形を呈す。拳人の礫が多く、やや赤化していた。下部にはやや大きい礫が見られた。

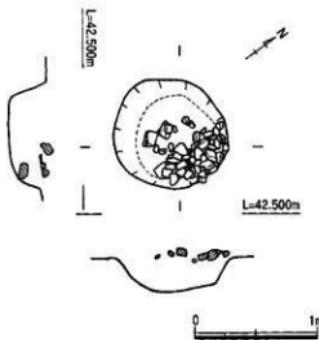


Fig.7 今井野遺跡(第10次)集石10号実測図  
(1/40)

縄文時代

1号集石

G 2 の南東に位置し、I層上位から検出された。掘込みは最径約 1m、最深 19 cm の円形を呈す。上部に拳人の礫を、下部には人頭大の礫を配していた。上下部とも赤化していた。この他、G 8・10 - I層検出の4・5号集石も同様の形態であった。

7号集石

G 11 の北東に位置し、I層上位から検出された。掘込みは最径 75 cm、最深 14 cm の円形を呈す。中央に人頭大の礫を配しやや赤化が見られた。G 3・6・10 - I層検出の2・3・6号集石も同様の形態であった。

また、拳大の礫で構成された8号集石 (G 12 - I層)・9号集石 (G 15 - 2層) が検出された。この他、II層上面から調査区全域にわたって礫群が検出された。礫群の一部は熱により赤化しているものも見受けられた。

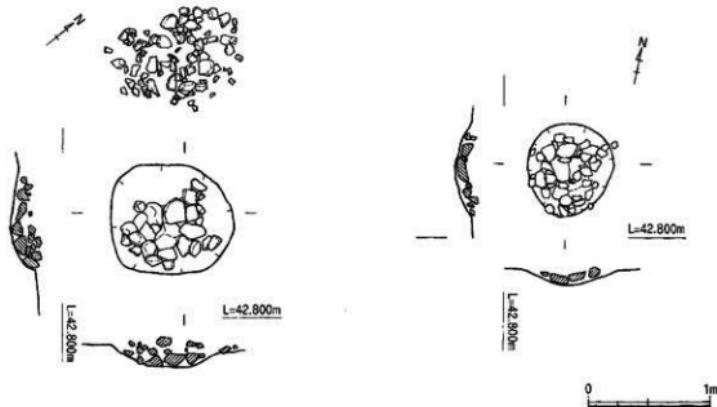


Fig.8 今井野遺跡(第10次)集石1号・集石7号実測図 (1/40)

#### (4) 出土遺物

##### 旧石器時代

###### ナイフ形石器

調査区より9点が出土している。層序別に見るとⅢ層-8点、Ⅳ層-1点、地区別ではG1-1点、G5-1点、G9-3点、G10-1点、G15-3点である。石材は流紋岩製8点、頁岩製1点である。

4639 流紋岩の縦長剥片を素材としている。主要剥離面及び背面より加工が施されている。

5163 頁岩の縦長剥片を素材としている基部加工ナイフである。主要剥離面より両側縁に加工を施し基部を作り出している。

5267 流紋岩の縦長剥片を素材としている基部加工ナイフである。主に主要剥離面より両側縁に加工を施し基部を作り出しているが、一部背面からの加工も見られる。先端部は欠損。

###### 剥片尖頭器

調査区より3点が出土している。層序別に見るとⅢ層-2点、Ⅳ層-1点、地区別ではG1-1点、G15-2点である。石材はすべて流紋岩製である。

5099 流紋岩の縦長剥片を素材としている。主要剥離面より両側縁に加工を施し基部を作り出している。先端部の両側縁にも主要剥離面からの加工が認められる。打面を残している。

5102 流紋岩の縦長剥片を素材としている。主要剥離面より両側縁に加工を施し基部を作り出している。打面を残している。

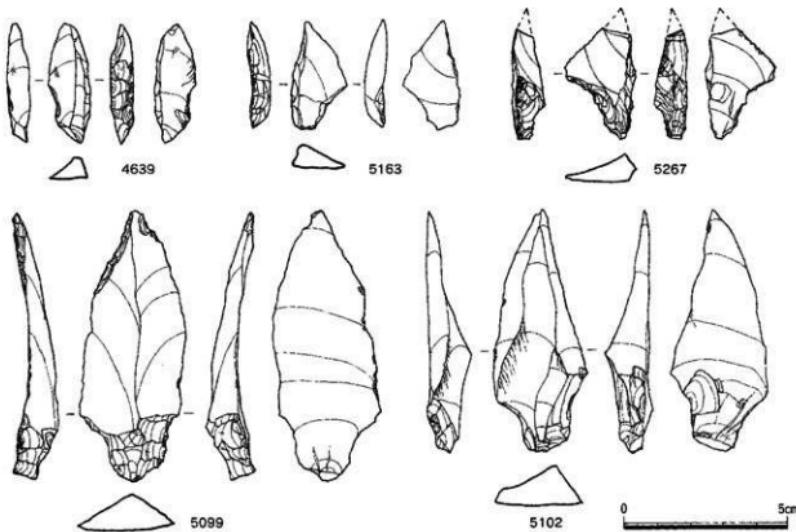


Fig.9 今井野遺跡(第10次)出土遺物実測図1 (2/3)

### 三棱尖頭器

G 2 - III層から 1 点のみ出土した。流紋岩製で約 1/2 が欠損している。基部と見られる。

- 4836 流紋岩の縦長剥片を素材としており、加工が表の二面に施されている。稜より一度大きな剥離を施し、その後、主要剥離面より二面に細かい加工を施している。

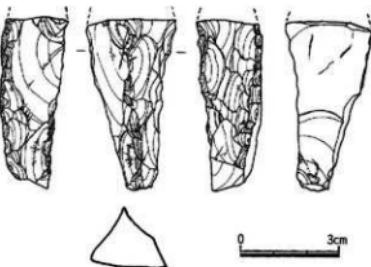


Fig.10 今井野遺跡(第10次)出土遺物実測図2  
(2/3)

### スクレイパー

調査区より 22 点出土している。層序別に見ると III層 - 16 点、IV層 - 6 点である。流紋岩製が主体であるが、頁岩製、チャート製のものも見られる。

- 4583 頁岩製。打面が残る。両側線に主に主要剥離面より加工を施し刃部を形成している。一部背面からの加工も見られる。Sスクレイパー。
- 4695 チャート製。小型でやや肉厚の剥片を素材としている。主要剥離面及び背面から加工を施し刃部を形成している。Rスクレイパー。
- 5179 流紋岩製。打面が残る。一部レキ面を残す、やや肉厚の横長剥片を素材とし、下線に主要剥離面より加工を施し刃部を形成している。Eスクレイパー。
- 5192 流紋岩製。打面が残る。やや肉厚の縦長剥片を素材とし、下線に主要剥離面より加工を施し刃部を形成している。Eスクレイパー。

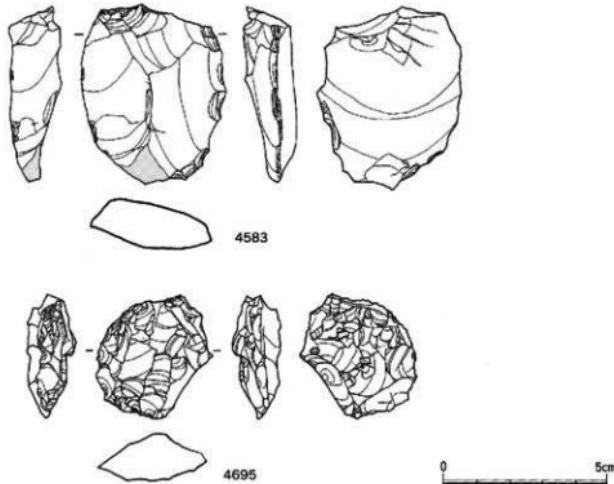


Fig.11 今井野遺跡(第10次)出土遺物実測図3 (2/3)

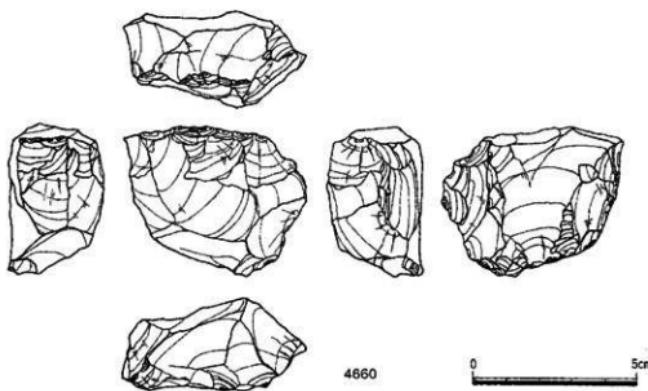
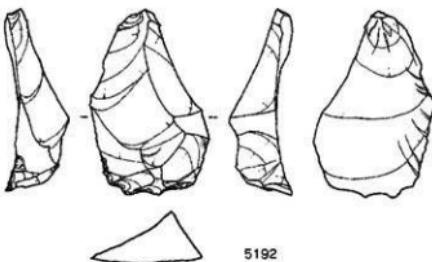
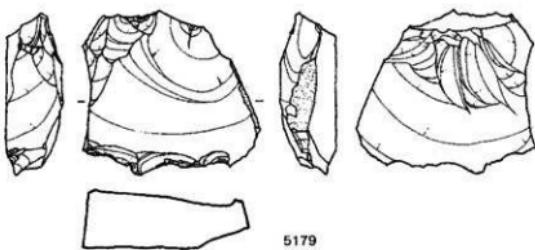


Fig.12 今井野遺跡(第10次)出土遺物実測図4 (2/3)

## 石核

調査区より4点出土している。Ⅲ層-1点、Ⅳ-3点で、流紋岩3点、頁岩1点である。

- 4660 流紋岩。打面を一部転移させながら剥片を作出している。一部打面調整の跡が伺える。

## 縄文時代

I層からII層にかけて縄文土器、石鏃、尖頭状石器、スクレイバー、石錐等の遺物約4,700点(石器-4,250、土器-450)が出土している。層序で見ると、I層-約2,600点、II層-2,100点である。

## 縄文土器

土器は押型文、無文土器が多く耕作の影響か細片化が著しい。

- 442 深鉢の口縁部。内外面に梢円押型文を横方向に施している。口縁部は直立する。

- 576 深鉢の口縁部。内外面に山形押型文を横方向に施している。口縁部はやや外反する。外面の施文がやや斜めである。

- 586 深鉢の口縁部。内外面に山形押型文を横方向に施している。口縁部は直立する。

- 967 深鉢の口縁部。内外面に梢円押型文を横方向に施している。口縁部は直立する。

- 933 深鉢の口縁部でこぶ状の貼付突帯を持つ。内外面無文で、ナデ調整である。内外面に指圧痕が認められる。器壁が厚い。

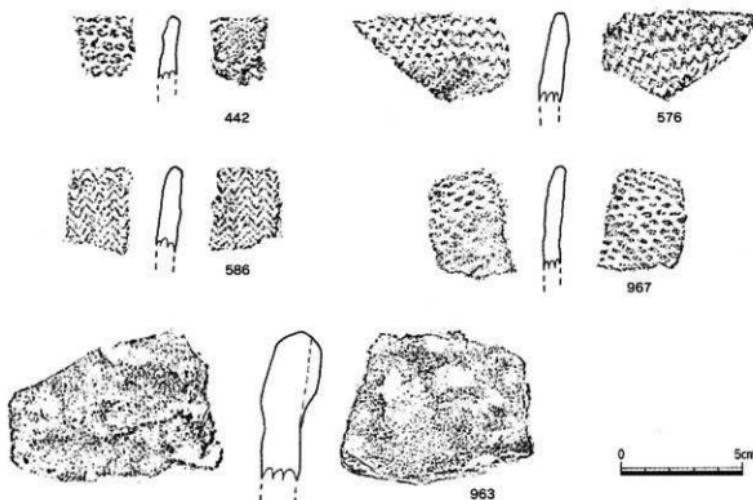


Fig.13 今井野遺跡(第10次)出土遺物実測図5 (1/2)

## 石鏃

調査区のⅠ～Ⅱ層より約200点の石鏃が出土している。形態から五角形、正三角形、二等辺三角形の3つに分類でき、さらに基部の形状から平基、浅い抉り、V字抉り、U字抉りの4種に細分できる。

- 294 全体形が五角形を呈しており、基部は平基式である。チャート製。
- 946 全体形が正三角形を呈しており、基部にV字状の抉りを持っている。チャート製。
- 1306 全体形が正三角形を呈しており、基部に浅い抉りを持つ。脚端は平らである。チャート製。
- 2688 全体形が正三角形を呈しており、基部にU字状の深い抉りを持つ。黒曜石製。
- 3116 全体形が二等辺三角形を呈しており、側線部は鋸歯状である。基部に浅い抉りを持っている。チャート製。
- 3244 全体形が二等辺三角形を呈しており、基部にV字状の抉りを持つ。脚端は平らである。チャート製。
- 4342 全体形が二等辺三角形を呈しており、基部にU字状の抉りを持っている。脚端は丸い。チャート製。
- 2977 全体形が正三角形を呈しており、基部に約1/2程U字状の抉りを持っている。脚端は尖る。チャート製。

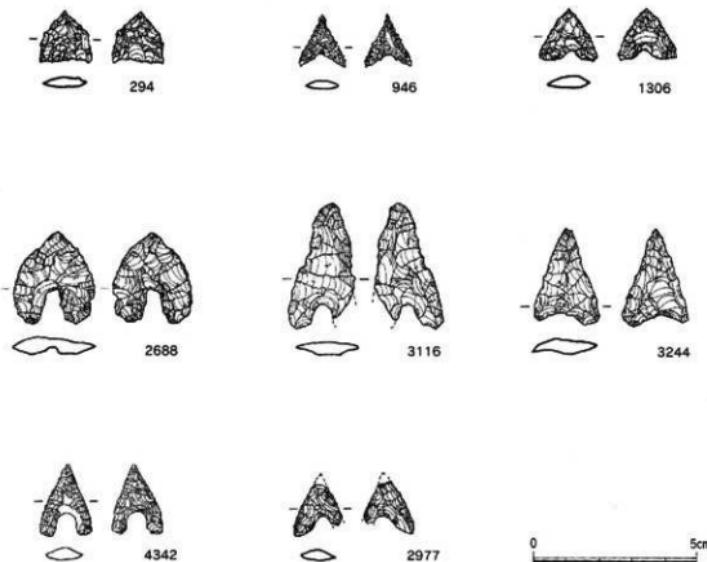


Fig.14 今井野遺跡(第10次)出土遺物実測図6 (2/3)

### 尖頭状石器

調査区のI～II層より27点出土している。チャート製26点、流紋岩製1点である。

- 1420 全体形が二等辺三角形を呈している。基部がやや円基で、断面が厚い。チャート製。  
2984 全体形が二等辺三角形を呈しており、基部が平基式である。チャート製。  
3517 全体形が正三角形を呈しており、基部は平基式である。断面が厚い。チャート製。

### スクレイパー

調査区より105点出土している。層序で見ると、I層-53点、II層-52点である。チャート製が多数で、小型のものが多い。

- 793 チャート製。小型の剥片を素材とし、主要剥離面及び背面より加工を施し刃部を形成している。Rスクレイパー。  
2962 チャート製。下縁に主要剥離面及び背面より加工を施し刃部を形成している。Eスクレイパー。  
1639 流紋岩製。主要剥離面及び背面より加工を施し、打面を削除するように刃部を形成している。Sスクレイパー。  
2786 流紋岩製。「く」の字に湾曲した縦長剥片を素材としている。両側縁に主要剥離面より加工を施し刃部を形成している。Rスクレイパー。  
5015 貝岩製。打面が残る。縦長の剥片を素材とし、側縁に主要剥離面より加工を施し刃部を形成している。Sスクレイパー。

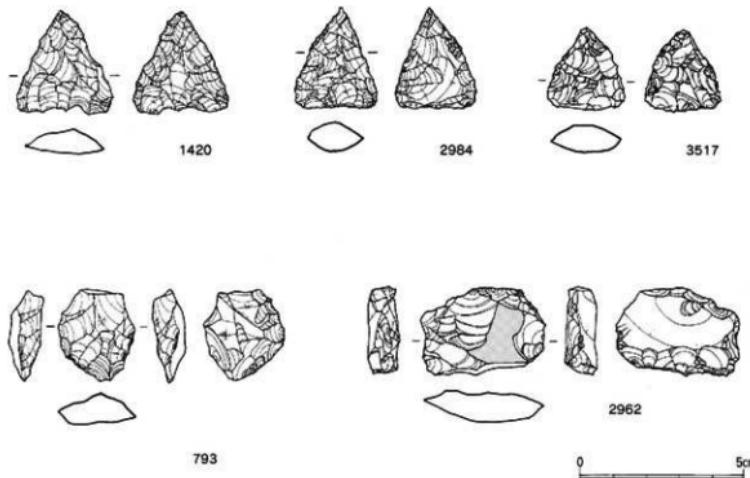


Fig.15 今井野遺跡(第10次)出土遺物実測図7 (2/3)

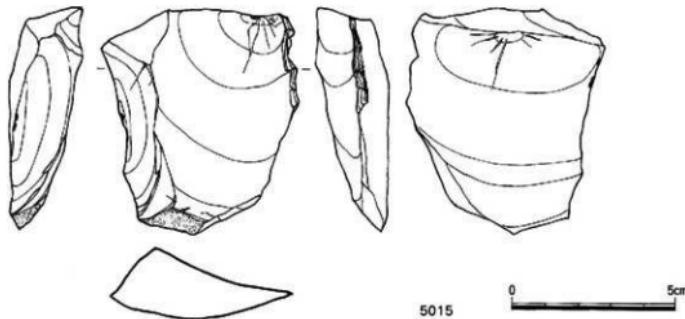
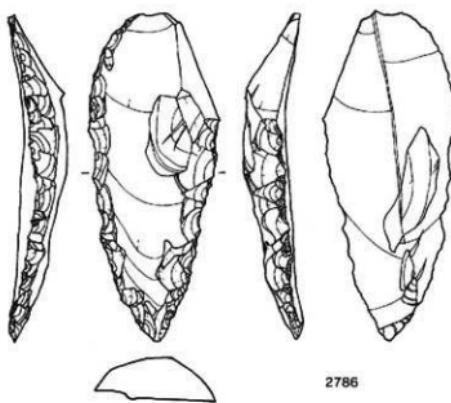
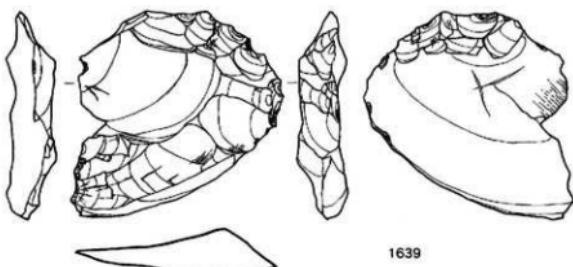


Fig.16 今井野遺跡(第10次)出土遺物実測図8 (2/3)

### 石錐

調査区のⅠ～Ⅱ層より4点出土している。チャート製3点、流紋岩製1点である。

803 流紋岩の縦長剥片を素材としている。剥片の先端部に主要剥離面から加工し尖頭部を形成している。打点側には二次的な加工が見られる。

2777 やや肉厚の剥片の先端に加工を施し、尖頭部を形成している。チャート製。

### 敲石・磨石

調査区より16点出土している。棒状タイプと円形タイプ、梢円形タイプとに分類される。

19 砂岩製。形状は梢円形を呈し、小型である。側縁に敲打痕が見られる。

3209 流紋岩製。形状は棒状を呈し、下部及び両側縁の一部に敲打痕が見られる。側縁の表裏面には磨痕も見られる。上部には交互剥離により刃部を形成している。

### 礫器

調査区より6点出土している。うち1点は表採である。

190 砂岩製。一部レキ面を残す。両側辺には交互剥離により加工を施している。下縁には一部敲痕が見られる。

3566 砂岩製。一部レキ面を残す。レキ面より加工を施している。下縁には交互剥離により加工を施し刃部を形成している。

### くぼみ石

調査区G5-Ⅰ層から1点のみ出土している。

1520 凝灰岩製。形状は梢凸形を呈する。表裏面の中央にくぼみを持つ。

### (5)まとめ

今井野遺跡(第10次)は、平成元年度(1次調査)の調査地に隣接している。1次調査では、本遺跡のⅢ層以下(旧石器時代層)の調査は実施していないが、Ⅰ・Ⅱ層から縄文早期の集石遺構1基、砾群、押形文字器、石錐等が出土している。また本遺跡ではなかった弥生後期の土器の出土が確認され2つの時期が確認されている。今回、縄文早期の集石遺構や砾群の検出は同様のものであるが、弥生時代の遺物の出土はなかった。これは、調査地が耕作による削平を受けたため消失したものと考えられた。

今回の調査地は、丘陵の最西端に位置しながらも、非常に良好な資料を提供してくれ、また文献記録を裏付ける遺跡であった。2つの時代にわたる多種多様な遺物が検出されたが、時間・経費等の制約からそれについて詳細な報告ができなかった。出土数や器種分類についてもさらに詳細な検討を行い、今後機会を設け報告したいと思う。

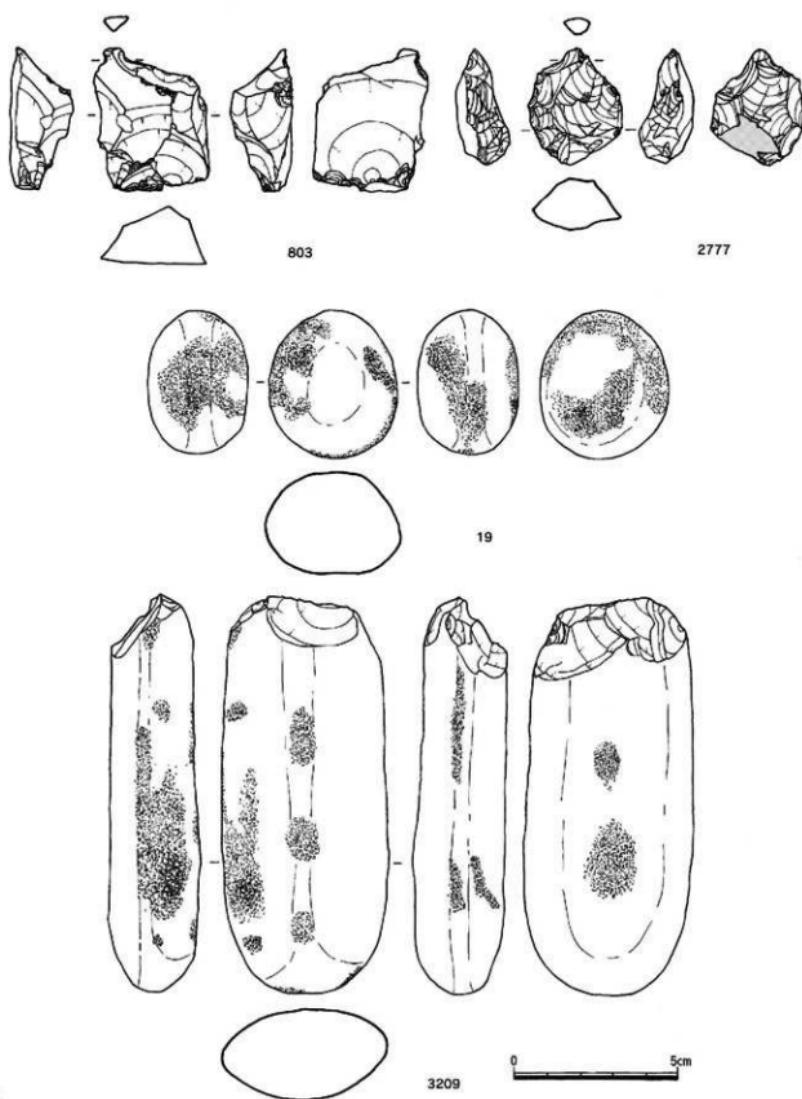
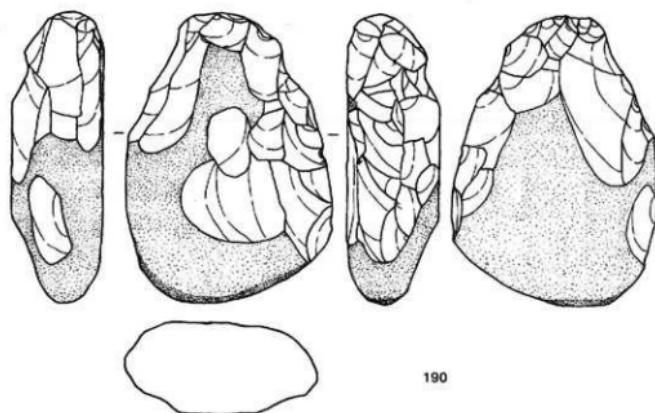


Fig.17 今井野遺跡(第10次)出土遺物実測図9 (2/3)



190

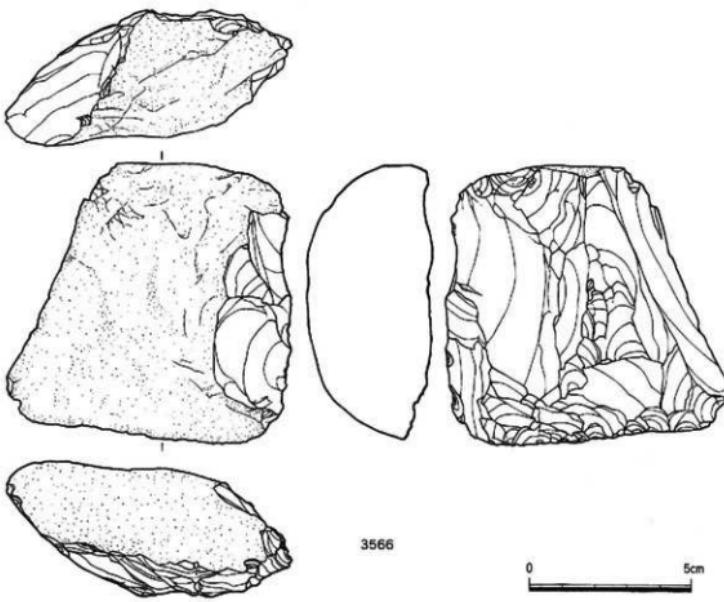


Fig.18 今井野遺跡(第10次)出土遺物実測図10 (2/3)

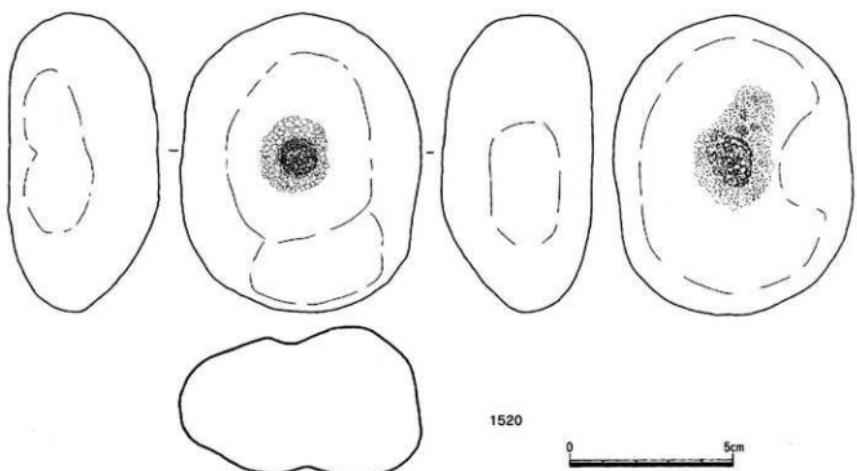


Fig.19 今井野遺跡(第10次)出土遺物実測図11 (2/3)



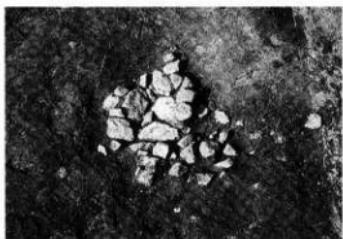
PL.1 今井野遺跡(第10次)調査風景



PL.2 今井野遺跡(第10次)集石10号



PL.3 今井野遺跡(第10次)集石1号



PL.4 今井野遺跡(第10次)集石7号

## ナイフ形石器

No	層	石 材	標 高(m)	最長(cm)	最幅(cm)	最厚(cm)	重量(g)	出土地点	図面
3841+5083	III	流紋岩	42.575	4.1	2.4	1.0	8.0	G-15	
4608+4630	III	流紋岩	42.066	3.5	1.5	0.8	2.9	G-1	
4639	III	流紋岩	41.995	3.5	1.2	0.6	2.5	G-5	実
5099	III	流紋岩	42.340	8.2	3.1	1.0	22.5	G-15	
5102	III	流紋岩	42.357	7.3	2.8	1.1	15.0	G-15	
5150	III	流紋岩	42.065	1.9	3.1	0.8	5.0	G-9	
5163	III	貞岩	42.183	3.3	1.6	0.5	2.5	G-9	実
5186	III	流紋岩	42.182	3.0	1.7	0.7	2.5	G-9	
5267	IV	流紋岩	42.066	3.2	2.2	1.0	2.5	G-10	実

## 剥片尖頭器

No	層	石 材	標 高(m)	最長(cm)	最幅(cm)	最厚(cm)	重量(g)	出土地点	図面
5099	III	流紋岩	42.340	8.2	3.1	1.0	22.5	G-15	実
5102	III	流紋岩	42.357	7.3	2.8	1.1	15.0	G-15	
4613	IV	流紋岩	42.025	7.9	4.4	1.5	62.5	G-1	

## 三棱尖頭器

No	層	石 材	標 高(m)	最長(cm)	最幅(cm)	最厚(cm)	重量(g)	出土地点	図面
4836	III	流紋岩	42.194	5.4	2.7	1.8	22.5	G-2	実

## スクレイパー

No	層	石 材	標 高(m)	最長(cm)	最幅(cm)	最厚(cm)	重量(g)	出土地点	図面
4380	III	流紋岩	42.171	1.6	4.1	0.9	5.0	G-1	
4387	III	流紋岩	42.214	3.5	4.5	0.9	12.5	G-1	
4513	III	チャート	42.422	4.3	3.2	1.1	15.0	G-3	
4564	III	流紋岩	42.275	4.5	5.5	2.0	52.5	G-3	
4583	III	貞岩	42.367	5.7	4.4	1.4	32.5	G-4	実
4623	III	流紋岩	42.213	4.5	3.4	0.7	12.5	G-5	
4629	III	流紋岩	42.033	3.7	5.0	1.6	30.0	G-5	
4695	III	チャート	42.335	3.9	3.4	1.3	17.5	G-7	実
5042	III	流紋岩	42.286	7.0	6.1	2.0	120.0	G-11	
5193	III	流紋岩	42.208	6.5	4.5	2.5	75.0	G-9	
5202	III	チャート	42.376	3.1	2.1	0.9	5.0	G-10	
5205	III	流紋岩	42.224	6.7	4.0	0.9	17.5	G-10	
5192	III	流紋岩	42.152	5.7	3.5	1.5	22.5	G-9	実
5188	III	流紋岩	42.246	3.7	2.4	1.1	7.5	G-9	
3832	III	チャート	42.565	2.8	2.5	0.5	5.0	G-15	
4644	III	流紋岩	42.315	8.4	5.2	1.9	80.0	G-6	
4638	IV	流紋岩	41.937	6.5	4.8	2.1	60.0	G-5	
4824	IV	流紋岩	42.033	5.2	6.0	1.6	52.5	G-7	
5153	IV	流紋岩	42.051	5.9	3.9	1.7	45.0	G-9	
5185	IV	流紋岩	42.087	4.5	2.9	1.2	12.5	G-9	
5179	IV	流紋岩	42.097	5.0	6.0	1.7	55.0	G-9	実
5237	IV	流紋岩	42.119	6.9	5.2	1.6	55.0	G-13	

## 石核

No	層	石 材	標 高(m)	最長(cm)	最幅(cm)	最厚(cm)	重量(g)	出土地点	図面
4558	III	貞岩	42.276	6.7	6.0	2.9	165.0	G-3	
4660	IV	流紋岩	41.949	4.4	5.6	2.6	80.0	G-5	実
4666	IV	流紋岩	41.996	4.4	5.8	2.3	50.0	G-5	
4628	IV	流紋岩	41.988	5.0	3.6	2.0	40.0	G-5	

## 二次加工剥片

No	層	石 材	標 高(m)	最長(cm)	最幅(cm)	最厚(cm)	重量(g)	出土地点	図面
4542	III	貞岩	42.431	6.8	2.6	1.0	15.0	G-3	

第2表 今井野遺跡(第10次)主要遺物観察表1(旧石器)

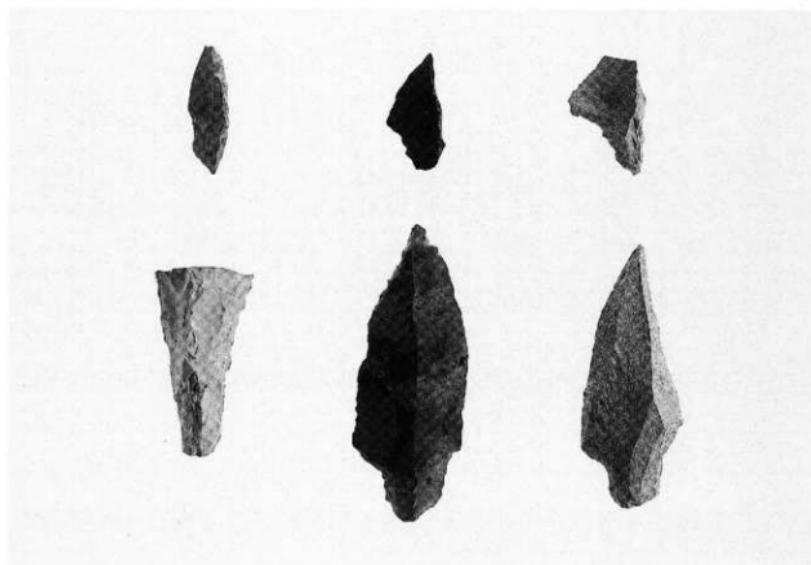
## 使用痕剥片

No	層	石 材	標 高(m)	最長(cm)	最幅(cm)	最厚(cm)	重量(g)	出土地点	図面
4371	III	流紋岩	42.249	3.4	1.8	0.6	5.0	G- 1	
4374	III	流紋岩	42.265	4.4	2.8	1.0	15.0	G- 1	
4388	III	流紋岩	42.191	2.8	4.4	1.0	10.0	G- 1	
4394	III	流紋岩	42.300	3.1	2.3	0.6	5.0	G- 1	
4414	III	流紋岩	42.021	2.3	4.0	1.2	7.5	G- 1	
4444	III	流紋岩	42.194	5.0	4.6	1.6	25.0	G- 5	
4448	III	流紋岩	42.205	4.7	3.3	1.0	15.0	G- 5	
4452	III	流紋岩	42.200	3.5	3.3	1.2	10.0	G- 5	
4464	III	チャート	42.296	2.5	2.0	0.9	2.5	G- 5	
4599	III	流紋岩	42.107	4.5	4.2	1.2	25.5	G- 1	
4615	III	流紋岩	42.220	6.7	3.5	0.7	35.5	G- 2	
4641	III	頁岩	42.074	7.6	3.6	1.1	30.0	G- 5	
4712	III	流紋岩	42.311	3.1	2.9	0.7	10.0	G- 8	
5058	III	墨礫石	42.385	2.2	1.4	0.6	1.2	G-11	
5111	III	流紋岩	42.398	6.7	5.8	1.4	50.0	G-15	
5201	III	流紋岩	42.176	2.8	1.3	0.3	1.1	G-10	
4645	IV	流紋岩	41.937	8.2	3.9	1.4	50.0	G- 1	
5173	IV	流紋岩	42.077	7.0	3.9	1.2	35.0	G- 9	
5254	IV	流紋岩	42.195	4.9	5.0	2.2	45.0	G-14	

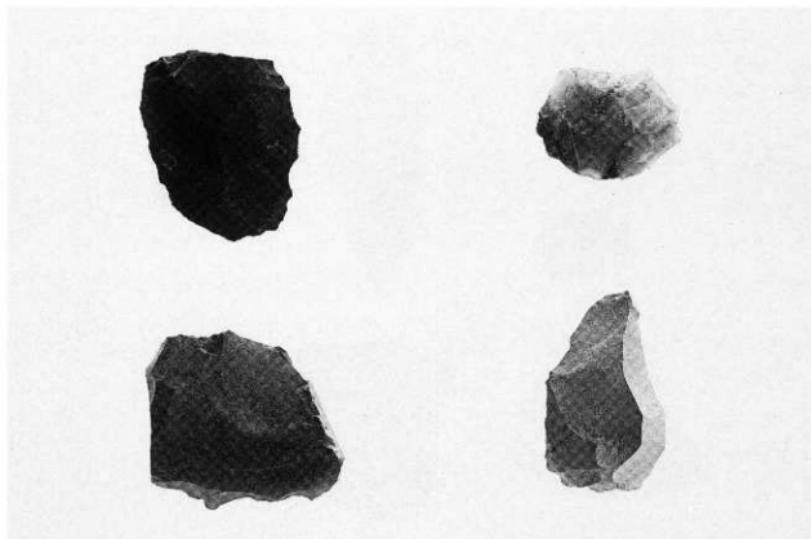
## 鐵行

No	層	石 材	標 高(m)	最長(cm)	最幅(cm)	最厚(cm)	重量(g)	出土地点	図面
4528	III	花崗岩	42.327	10.5	8.4	7.0	1000.0	G-3	
5121	III	砂岩	42.343	12.8	8.2	3.2	550.0	G-16	

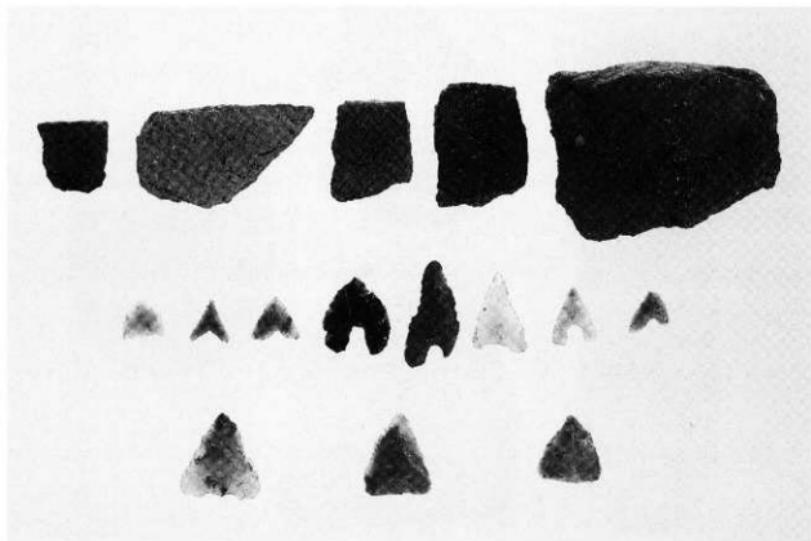
第3表 今井野遺跡(第10次)主要遺物觀察表2(旧石器)



PL.5 今井野遺跡(第10次)出土遺物1



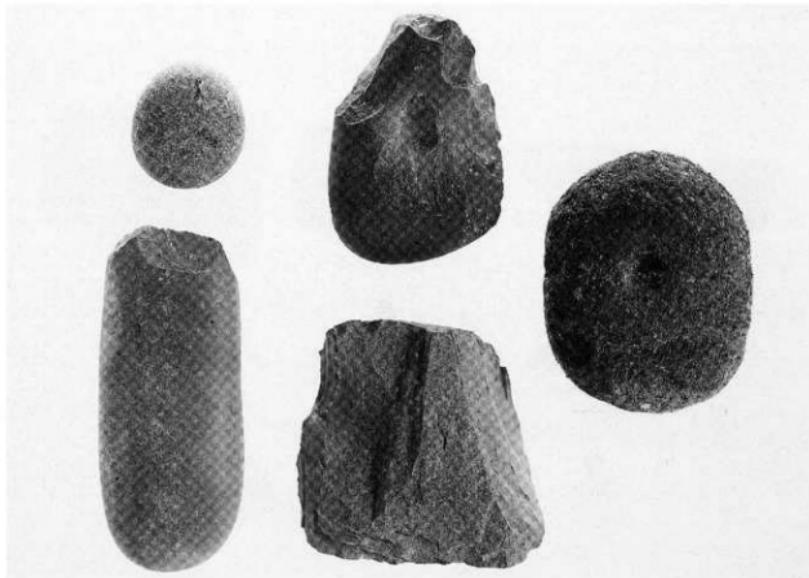
PL.6 今井野遺跡(第10次)出土遺物2



PL.7 今井野遺跡(第10次)出土遺物3



PL.8 今井野遺跡(第10次)出土遺物4



PL.9 今井野遺跡(第10次)出土遺物5

## 2. 浜町野中田地点

所在地 延岡市浜町 181 番地 1 外 20 筆  
調査原因 宅地造成  
調査期間 20010420 ~ 20010427

調査面積 51.3 m<sup>2</sup>  
担当者 山田  
処置 調査後破壊

### (1) 位置と環境

浜町は、海岸線より約 1 km 内陸に入った地域に、海岸線と並行して南北に分布する砂丘上に開けた浜屋敷集落を中心とした町で、周辺には水田地帯が広がり、西側には愛宕山が位置している。一帯は、浜川を取り囲むように古くから水田・塙田・畑作等が営まれていた地域である。江戸時代 17 世紀後半制作の絵図史料によると、付近には海岸線に平行するように浜川が描かれ、その状況から自然地形上のラグーンと推定される。昭和 24 年の GHQ 撮影の空撮写真から浜川の痕跡と見られる筋が確認され、近世以後新田開発が進んでいることが伺える。本地点は、そうした水田地帯の一角にあたり、西側に隣接して JR 日豊本線及び旧延岡宮林署の貯木場跡が所在し、近年の宅地開発等によって周辺の景観が大きく変貌しつつある。周辺では、過去において本格的な埋蔵文化財発掘調査は実施されていないが、延岡南駅周辺において試掘調査が数回に渡って実施され、旧浜川の河道及びラグーン跡が確認されている。また、西側に隣接する構口町には鬼ヶ城の地名が残っており、文献等に確認されていない中世城館跡と考えられ、愛宕山東側一帯が軍事・交通の要所であったことを示すものとして注目されている。また、大正時代～昭和時代にかけて JR 日豊本線の平原町付近の砂丘の開削工事において、弥生土器若しくは土師器? が出土したとの伝承が残っている。今回の調査地点は、平成 13 年 2 月 23 日付けで民間宅地開発業者から「文化財の所在の有無について」の照会を受けた。協議の結果、埋蔵文化財の有無の確認を行うこととなった。調査は、既に工事がスタートして水田の盛土作業が進んでいることから、工事工程との調整を図りながら必要な箇所についてトレノ調査法による上層確認を主体として実施することとした。



Fig. 20 浜町野中田地点位置図 (1/15,000)



PL. 10 浜町野中田地点調査地

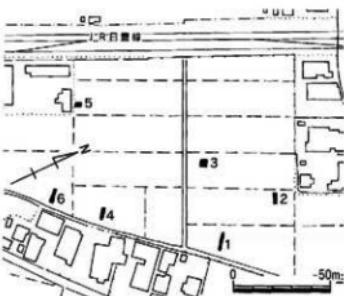


Fig. 21 浜町野中田地点調査区配置図 (1/2,500)

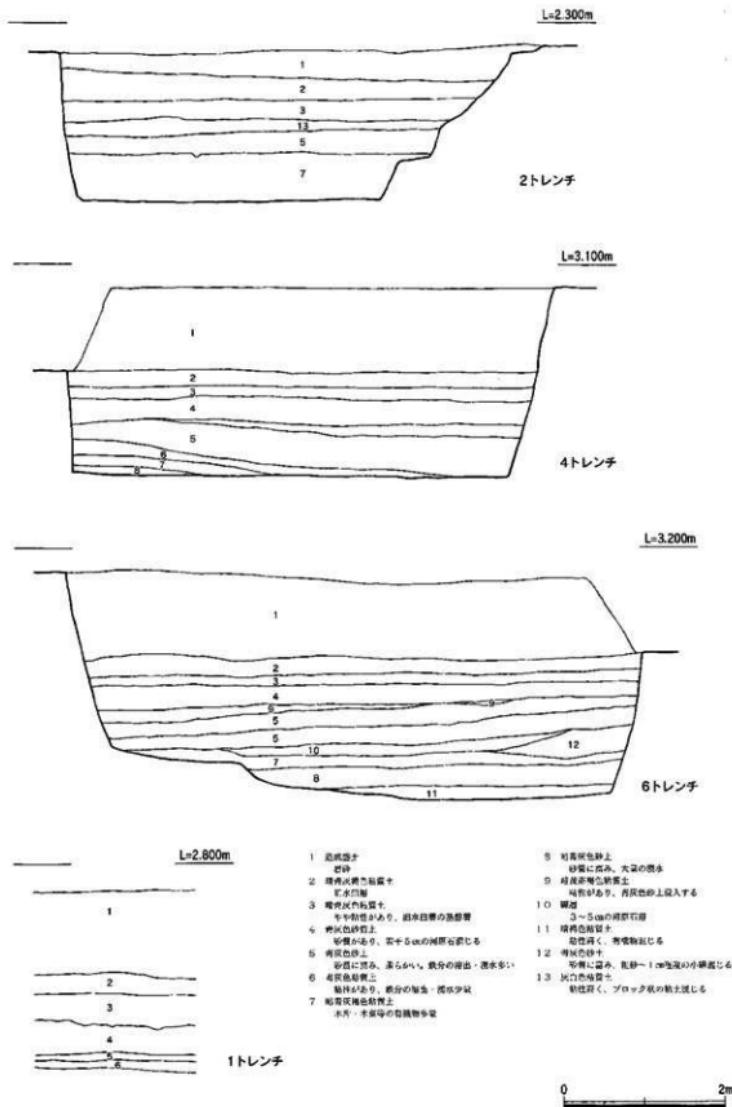


Fig.22 浜町野中田地点1・2・4・6トレンチ土層断面 (1/60)

## (2) 調査の概要

調査は、トレンチを6箇所設定して行った。基本層序は、以下のとおりである。1層 造成土、2層

旧水田、3層 暗青灰褐色粘質土で旧水田の基盤層、4層 明灰褐色粘質上で粘性高い、5層 青灰褐色粘質土で鉄分多く湧水あり、6層 暗灰褐色粘質土で大量の木片、木葉等の有機質、7層 暗青灰色砂土で湧水激しく崩落しやすい。1トレンチは、北東部の「浜屋敷」隣接地に設定した。4層は見られず、5層からの湧水が大量に確認された。2トレンチは、北部に設定した。5層は、他のトレンチに比べて荒砂が多く、6層は60 $\pm$ 以上確認され、河原石(約5 $\pm$ )を少量検出した。3・5トレンチは、5層から大量の湧水が認められた。4トレンチは東部に設定したところ、「浜屋敷」が立地する砂丘から西側に傾斜する層位が確認された。6トレンチは南東部に設定し、6層が他トレンチより低いレベルから検出された他、標高約0.6~0.8mから河原石の疊層が検出された。

## (3) 出土遺構

なし。

## (4) 出土遺物

なし。

## (5) まとめ

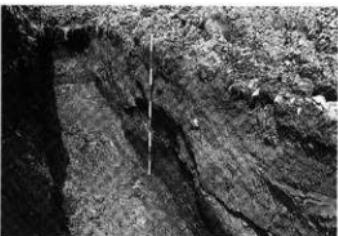
今回の調査では、水田跡等の埋蔵文化財に関連するものは確認されなかつたが、一帯の旧地形の変遷及び古環境推定に繋がるデータが得られ、今後の開発計画等に対する基礎資料となろう。



PL.11 浜町野中田地点調査風景



PL.12 浜町野中田地点4トレンチ土層断面



PL.13 浜町野中田地点6トレンチ土層断面

### 3. 延岡城内遺跡（第8次）

所在地	延岡市天神小路 228-1・本小路 232 外	調査面積	155.0 m <sup>2</sup>
調査原因	宅地造成	担当者	山田
調査期間	20010516 ~ 20010530	処置	調査後一部破壊

#### （1）位置と環境

延岡城は、慶長6～8年（1601～1603）にかけて初代延岡（県）藩主高橋元種によって築かれた県内最大の近世城郭である。城は、南北を東流する五ヶ瀬川・大瀬川を天然の外堀とし、城内には内堀が造られ、藩主の居宅があった西ノ丸（内藤記念館・亀井神社）と、本城（城山公園）の二郭で構成されている。城下には、本小路、桜小路の武家屋敷、城の東側には北町、中町、南町といった城下町が造られ、五ヶ瀬川北岸及大瀬川南岸にも武家屋敷などがつくられた。本調査地は、延岡城内の天神小路と本小路の境界付近に位置し、平坦で標高約7mを測る。南側には、城下絵図にも記載されている長さ（南北）約70m、最大幅（東西）約25m、標高約16mの石垣を有しない平坦面が存在している。これは、本城西側の防衛ラインの曲輪（本城西曲輪2）と考えられ、中世城郭を彷彿させる構造となっている。現在は、若干整地されて宮崎北部森林管理署延岡事務所（旧延岡营林署）林友寮の木造建物が建ち、南側は堀切（現市道）を挟んで曲輪（本城西曲輪1）があり、アスレチック広場として利用されている。また、本城曲輪2の北東脇からは、北大手門下の内堀方向に素堀とみられる堀削が築かれていた。調査地は、時代によって土地利用に違いがみられるが、内藤家治世の18世紀後半～19世紀代には馬場として利用され、幕末頃には「おつきや」として米などの脱穀を行っていたといわれる長屋街が建ち並び、藩の御用絵師であった鈴木月谷を輩出した由緒ある地区でもある。

#### （2）調査の概要

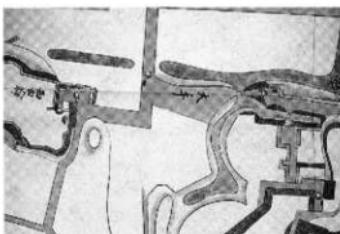
調査は、対象地の中央部で東西に本小路と天神小路に分断されているため、西区は平坦面に1トレンチ及び本城西曲輪2に向かう傾斜地に2トレンチ



Fig.23 延岡城内遺跡（第8次）位置図  
(1/15,000)



PL.14 延岡城下ノ図(18世紀後半～19世紀)  
明治大学刑事博物館所蔵



PL.15 日向国延岡城石垣並土居破損之覽(嘉永5年・1852)  
明治大学刑事博物館所蔵

を設定した。東区は清掃後に礎石列が確認されたことからこの全容を把握することを中心と実施することとした。調査の結果、2トレンチから遺物は確認されなかつたものの、本城西曲輪2の傾斜面に繁る地山岩列が検出されたことから、本城西曲輪2は、現状よりも北側に約25m延びていたことが判明した。1トレンチは、西側に溝状の落ち込みが確認され、近世～近代に至る陶磁器類が検出された。東区では建物跡が検出され、北側に隣接して井戸跡が確認された。遺物は、南西端部から土鍋が検出された他、井戸廻りの外枠から普請役所に奉納されたと考えられる石塔が検出された。



PL.16 延岡城内遺跡(第8次)周辺航空写真  
(1990年)



PL.17 延岡城内遺跡(第8次)調査地

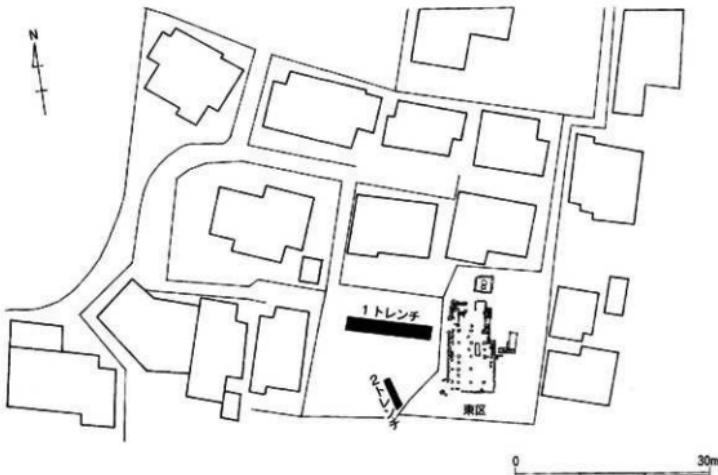


Fig.24 延岡城内遺跡(第8次)調査区配置図 (1/750)

### (3) 検出遺構

#### 溝状遺構

1 トレンチの土層観察において西側から検出された。詳細な規模等は不明である。

#### 礎石建物跡

東区から検出され、東面を玄関口とする東西約7m、南北約14mの一軒分の礎石列が検出された。この建物は、建築年代は不明であるが昭和40年代頃まで存在していた。礎石には延岡城関連とみられる石垣の一部が転用されている。



PL.18 延岡城内遺跡(第8次)1トレンチ土層断面

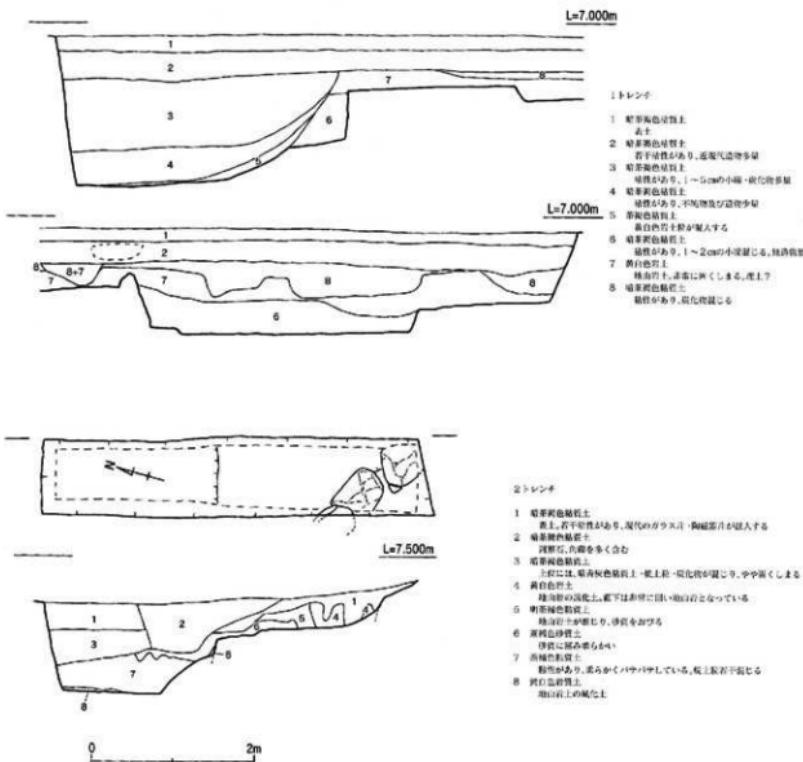


Fig.25 延岡城内遺跡(第8次)1・2トレンチ土層断面



PL.19 延岡城内遺跡(第8次)東区遺構検出状況

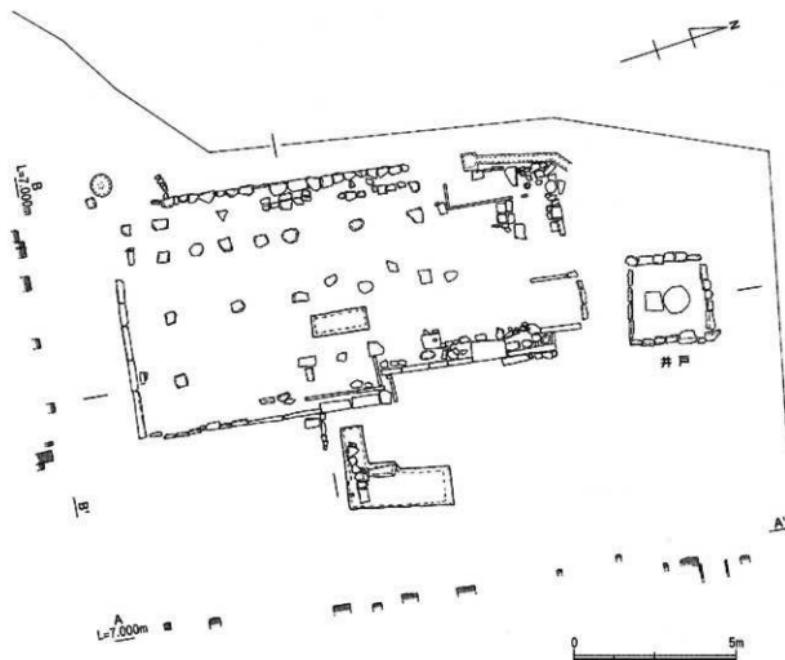


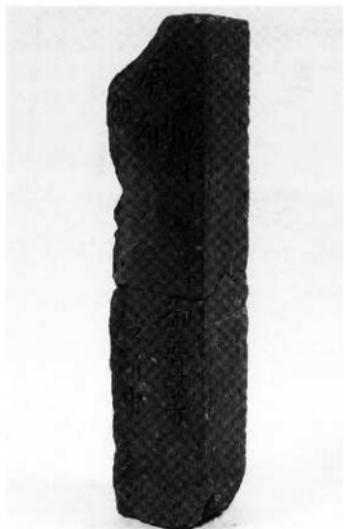
Fig.26 延岡城内遺跡(第8次) 東区検出遺構分布図 (1/150)



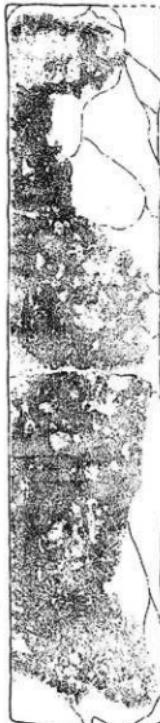
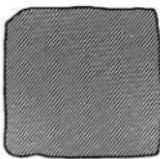
PL.20 延岡城内遺跡(第8次)東区石塔棟出状況1



PL.21 延岡城内遺跡(第8次)東区石塔棟出状況2



PL.22 延岡城内遺跡(第8次)出土遺物1 石塔



1

0 10cm

Fig.27 延岡城内遺跡(第8次)出土遺物実測図1 (1/5)

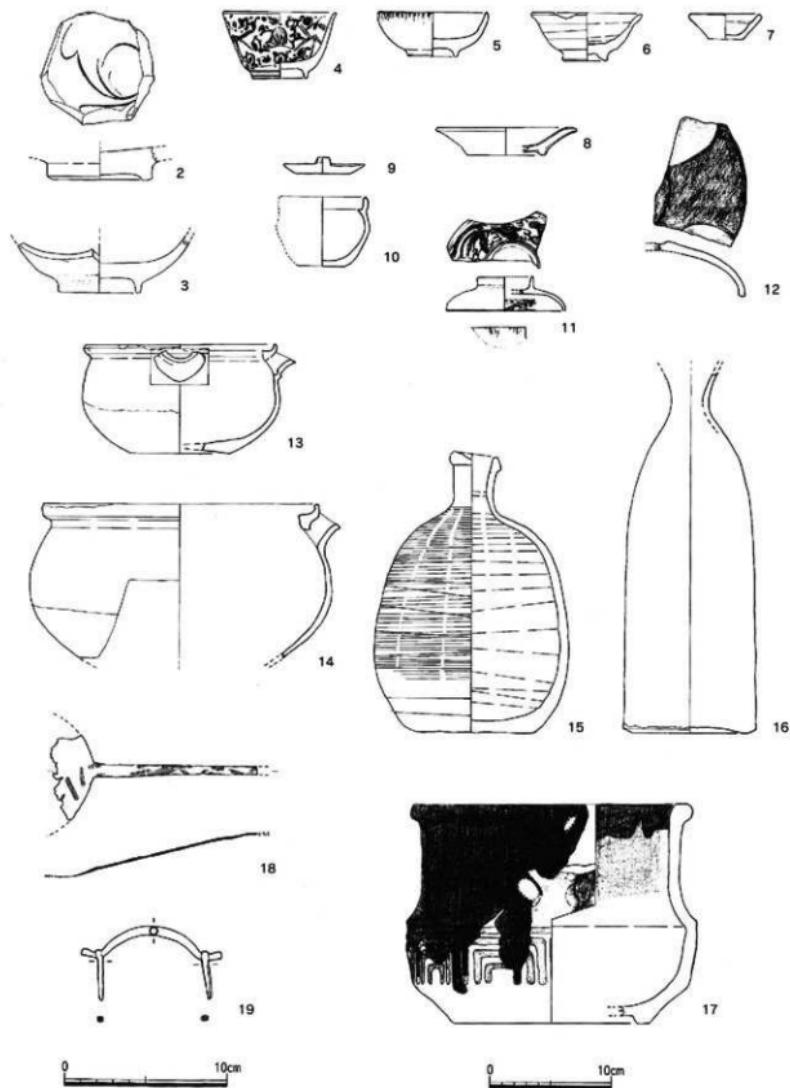


Fig.28 延岡城内遺跡(第8次)出土遺物実測図2 陶磁器(1/3)(15,17=1/4)

(4) 出土遺物

1は、石塔である。阿蘇溶結凝灰岩製で、縦15.3cm×横16.0cm×高さ73.5cmを有する。表面には一部欠損して詳細は不明であるが「奉納 御普請方役所中 文政十丁亥年(1827)閏□□□」の銘が彫り込まれ、凹面に朱が残っている。2は、中国龍泉窯の青磁碗である。3は、肥前磁器の染付碗である。見込みは蛇ノ目勧剥ぎで高台外面に2列圈線がみられる。4は、瀬戸・美濃磁器の染付小壺である。ほぼ完形品で外面に花唐草文が施されている。5は、肥前磁器の染付小壺である。外面口縁部に雨降文がみられる。6は、陶器の小壺である。内外面は巻刷毛目で、底部・高台内面は露胎となっている。高台内面には刻印がみられる。7は、関西系陶器の鍋である。玩具とみられ、内面に渦軸が施されている。8は、三田青磁の小皿である。見込みには陽刻文がみられ、貼付高台となっている。9・10は、備前系陶器の蓋付小壺である。蓋にはツマミが付き、内面は無釉である。



Fig.29 延岡城内遺跡(第8次)出土遺物実測図3 磁器(1/3)(20~24=1/2)

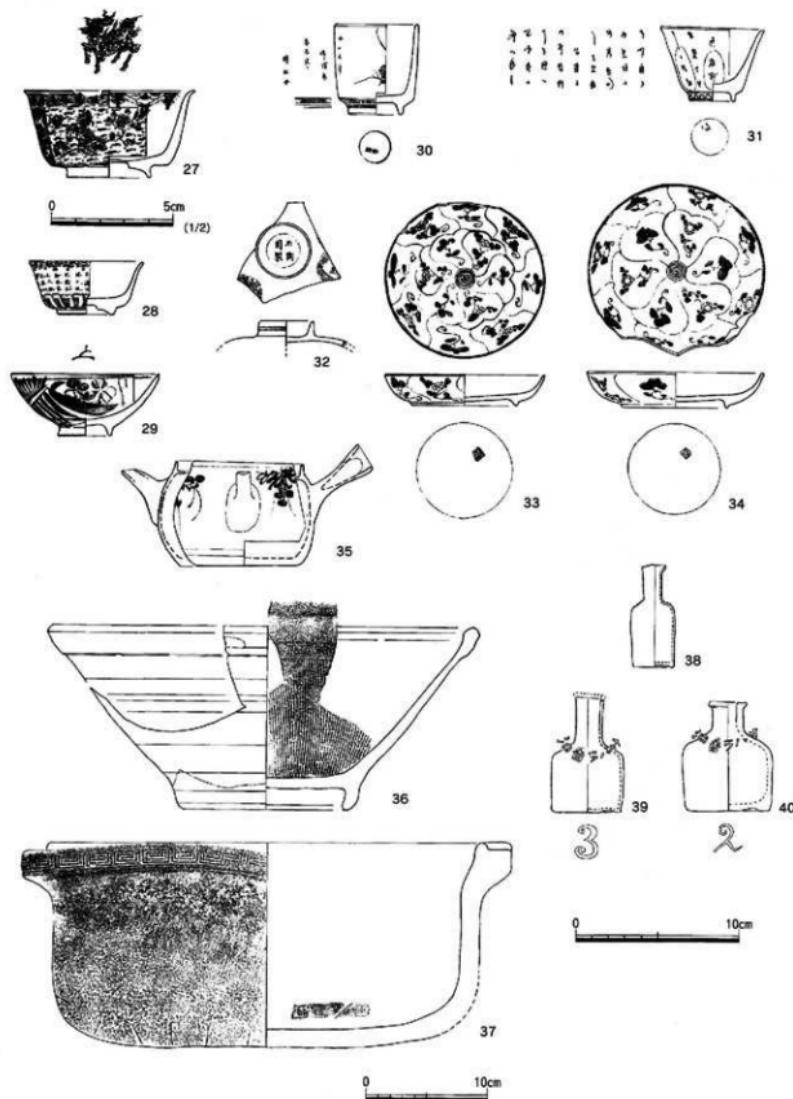


Fig.30 延岡城内遺跡（第8次）出土遺物実測図4 陶磁器・土製品・ガラス製品 (1/3) (27=1/2) (36,37=1/4)

11は、関西系磁器の染付碗蓋である。外面には鳳凰文が施され、内面には銘款がみられる。12は、丸山焼（延岡）と考えられる陶器の蓋である。13・14は、関西系陶器の行平鍋である。何れも灰釉が施され、胴部下位は無釉である。15は、備前系陶器の徳利で、容量は3合を計る。表面には鉄釉がかけられ、胴部下位に瓢箪型に「ともつ」の刻印がみられる。16は、福岡産の陶器瓶である。緑釉がかけられている。17は、瀬戸・美濃陶器の火鉢である。胴部下位は灰釉で、上位に銅線釉がたっぷりかけられている。18・19は、青銅製品である。18は杓子である。19は、棚金具である。引出しなどの取っ手部分と考えられる。20は、肥前系磁器の染付碗である。型紙摺りで外面に松牡丹文が施されている。21は、肥前系磁器の染付碗である。型紙摺りで外面に店花文がみられる。22は、肥前系磁器の染付碗である。型紙摺りで外面に店草文・見込みに松竹梅文が施されている。23は、肥前系磁器の染付碗である。端反があり型紙摺りで捻割花文・菊竹文がみられる。24は、肥前系磁器の染付猪口である。端反碗で型紙摺りによって山水文が施されている。25は、肥前系磁器の染付碗である。端反碗で外面に竹菊蘭文・見込みに松竹梅文が施されている。26は、肥前系磁器の染付碗である。淡色で菊弁文が施されている。27は、瀬戸・美濃系磁器の染付小壺である。端反碗で銅板転写によって獅子文・牡丹文がみられる。28は、瀬戸・美濃系磁器の染付小壺である。端反碗で銅板転写によって詩句文が施されている。29は、瀬戸・美濃系磁器の色絵碗で、草花文が施されている。30は、瀬戸・美濃系磁器の染付小壺である。牡丹文・詩句文が施されている。31は、瀬戸・美濃系磁器の染付小壺である。6つの花弁状に成形され、漢詩句文が施されている。32は、瀬戸・美濃系磁器の染付碗蓋である。銅板転写で施文され、ツマミ内面に「玉陶園製」の銘款がみられる。33・34は、瀬戸・美濃系磁器の染付皿である。何れも内面に萱芝文が施され、高台内面に銘款がみられる。35は、瀬戸・美濃または関西系磁器の急須である。草花文が施されている。

36は、陶器の摺鉢である。見込みの摺口は中心に向かって左回りに入れられている。37は、土鍋である。内外面共にスカイ付着し、内面に「新案特許」の刻印がみられる。38～40はガラス製品である。38は瓶で胴部下位に屋号が認められる。39・40は化粧瓶で、何れも「サハラ香油」の会社名が確認され、底部には数字の「3」「2」が記されている。

## (5) まとめ

今回の調査は、数区画規模の宅地開発に伴うトレンチ調査といった制約されたものであった。しかし、上層の搅乱土を除くと近現代の遺構・遺物に混じって藩政時代のものが多数検出され、周辺には予想以上に良好な状態で遺構・遺物の存在を裏付けられる結果が得られた。このことは、周辺にも相当規模の遺構・遺物の存在が推定されるもので、延岡城の構造解明のためにも今後予想される各種開発事業に伴う発掘調査の充実が必要であるといえよう。



PL.23 延岡城内遺跡（第8次）出土遺物2-1  
陶磁器・青銅製品



PL.24 延岡城内遺跡（第8次）出土遺物2-2  
陶磁器・青銅製品



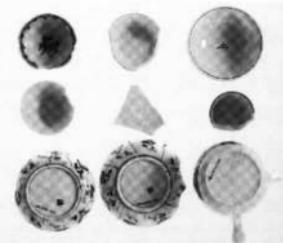
PL.25 延岡城内遺跡（第8次）出土遺物3  
陶器



PL.26 延岡城内遺跡（第8次）出土遺物4  
磁器



PL.27 延岡城内遺跡（第8次）出土遺物5-1  
磁器



PL.28 延岡城内遺跡（第8次）出土遺物5-2  
磁器



PL.29 延岡城内遺跡（第8次）出土遺物6  
陶器・土製品



PL.30 延岡城内遺跡（第8次）出土遺物7  
ガラス器

図面番号	種別	器種	出土地点	法量			形態及び文様	備考
				印井-長	印井-短	印井-高		
1	石製品	石塔	NJN8・東区井戸	73.5	16.0	15.3	「奉納 鶴音諸方役所中 文政十丁亥年岡田○○○路、門面に朱残る」	1827年
2	磁器	青磁碗	NJN8・1トレ溝・2~3層		5.8		曲花文、口入あり、底部・高台内面一部無釉	12~13世紀、中国・龍泉窯系
3	磁器	染付碗	NJN8・1トレ溝・2~3層		5.0		見込み蛇口・日目剥ぎ、底部剥り痕あり	18世紀後半、肥前(波佐見系)
4	磁器	染付小杯	NJN8・1トレ溝・2~3層	6.9	3.4	4.2	端反、花唐草文、底部無釉	幕末・瀬戸・美濃系
5	磁器	染付小杯	NJN8・1トレ溝・2~3層	6.8	3.0	2.8	雨降文	18世紀前半、肥前
6	陶器	小杯(猪L)	NJN8・1トレ溝・2~3層	6.3	2.6	3.0	高台内に刻印、底部・高台内面部胎	幕末・在地の可能性
7	陶器	鍋	NJN8・1トレ溝・2~3層	4.4	2.2	1.6	軟質、内面のみ褐釉、ミニチュア(玩具)	18~19世紀、関西系
8	磁器	青磁小皿	NJN8・1トレ溝・2~3層	8.6	4.8	1.7	見込み陽刻文、貼付高台、底部無釉	19世紀初~幕末・兵庫県三田
9	陶器	蓋	NJN8・1トレ溝・2~3層	4.9	3.3	1.0	ツマ付、内面無釉	18~19世紀、備前系
10	陶器	小壺	NJN8・1トレ溝・2~3層	5.2	2.8	5.3	側部輪だらね、腹部・底部一部無釉	18~19世紀、備前系
11	磁器	染付硝蓋	NJN8・1トレ溝・2~3層	7.3	3.5	2.1	外面飄鳳文、内面銘款あり	1820~1860代、関西系
12	陶器	蓋	NJN8・1トレ溝・2~3層	13.6		3.3	透明釉	幕末・延岡・丸山焼
13	陶器	行平鍋	NJN8・1トレ溝・2~3層	11.5	6.0	6.8	灰釉・底部無釉	19世紀、関西系
14	陶器	行平鍋	NJN8・1トレ溝・2~3層	16.8			灰釉	19世紀、関西系
15	陶器	徳利	NJN8・1トレ溝・2~3層	4.3	10.0	22.6	3合、表面に薄い鉄薙、外面に「ともつ」の銘	18~19世紀、備前系
16	陶器	瓶(焼徳利)	NJN8・1トレ溝・2~3層		7.0		緑釉	19世紀、福岡
17	陶器	火鉢	NJN8・1トレ溝・2~3層	22.9	15.8	18.0	頭半分に繊絆輪、下部は灰釉	19世紀・瀬戸・美濃
18	青銅製品	杓子	NJN8・1トレ溝・2~3層	12.6			表面に緑青	
19	青銅製品	櫛金具	NJN8・1トレ溝・2~3層	8.6			表面に緑青	
20	磁器	染付碗	NJN8・1トレ溝・2~3層	11.9	4.1	4.7	型紙彫り、松牡丹文、底部無釉	明治~大正、肥前系
21	磁器	染付翁	NJN8・1トレ溝・2~3層	11.8	4.4	4.8	型紙彫り、唐花文	明治~大正、肥前系
22	磁器	染付翁	NJN8・1トレ溝・2~3層	9.6	3.6	5.0	型紙彫り、唐花文、見込み松竹梅文、底部沙目底あり	明治~大正、肥前系
23	磁器	染付碗	NJN8・1トレ溝・2~3層	10.0	3.8	5.9	端反碗、型紙彫り、外側松竹梅文、菊竹文、見込み松竹梅文	明治~大正、肥前系
24	磁器	染付猪口	NJN8・1トレ溝・2~3層	8.0	4.4	5.6	端反碗、型紙彫り、山水文、底部無釉	明治~大正、肥前系
25	磁器	染付碗	NJN8・1トレ溝・2~3層	10.0	4.0	5.6	端反碗、竹菊文、見込み松竹梅文	明治~大正、肥前系
26	磁器	染付碗	NJN8・1トレ溝・2~3層	10.0	4.0	4.1	淡色の菊文文、底部無釉	大正~昭和、肥前系
27	磁器	染付小杯	NJN8・1トレ溝・2~3層	7.0	3.4	3.6	端反碗、獣子・牡丹文(網敷板写)、高台内面無釉	明治後~大正、瀬戸・美濃系
28	磁器	染付小杯	NJN8・1トレ溝・2~3層	6.8	3.7	3.3	端反碗、詩句文(網版転写)、高台内面無釉	明治後~大正、瀬戸・美濃系
29	磁器	色絵碗	NJN8・1トレ溝・2~3層	9.0	3.3	4.9	草花文	明治~昭和前・瀬戸・美濃
30	磁器	染付小杯	NJN8・1トレ溝・2~3層	5.0	3.1	5.6	牡丹文・詩句文	明治~大正、瀬戸・美濃系
31	磁器	染付小杯	NJN8・1トレ溝・2~3層	6.3	2.7	4.5	満詩句文	明治~昭和前・瀬戸・美濃系
32	磁器	染付碗蓋	NJN8・1トレ溝・2~3層		3.3		銅版転写、ツマミ内「玉海園」銘	明治後~大正、瀬戸・美濃系
33	磁器	染付皿	NJN8・1トレ溝・2~3層	9.6	6.4	1.9	蓋文、高台内面銘款	明治~大正、瀬戸・美濃系
34	磁器	染付皿	NJN8・1トレ溝・2~3層	10.8	6.3	2.2	蓋文、高台内面銘款	明治~大正、瀬戸・美濃系
35	磁器	急須	NJN8・1トレ溝・2~3層	6.7	6.3	6.4	草花文、底部無釉	明治~昭和前・瀬戸・美濃又は関西
36	陶器	插鉢	NJN8・1トレ溝・2~3層	34.5	13.6	15.1	内面使用痕あり、底部無釉	
37	土製品	土鍋	NJN8・堀跡	40.2	32.8	16.9	内面「新案特許」銘、内外面スズ付着	大正~昭和
38	ガラス器	瓶	NJN8・1トレ溝・2~3層	1.4	2.4	6.3	口縁部に注口・胴部下位に屋号あり	大正~昭和
39	ガラス器	化粧瓶	NJN8・1トレ溝・2~3層		4.3		胴部「サハラ香油」、底部「13」銘	大正~昭和
40	ガラス器	化粧瓶	NJN8・1トレ溝・2~3層	2.3	5.2	6.8	胴部「サハラ香油」、底部「12」銘	大正~昭和

表4表 延岡城内遺跡(第8次)出土遺物観察表

## 4. 北小路遺跡

所在地 延岡市北小路 14 番地 1  
調査原因 病院新築工事  
調査期間 20010822 ~ 20010912

調査面積 330.0 m<sup>2</sup>  
担当者 高浦  
処置 調査後破壊

### (1) 位置と環境

当遺跡は、延岡市を流れる五ヶ瀬川の左岸に位置する。五ヶ瀬川を挟んだ南約 500m には、宮崎県内を代表する近世城郭の延岡城が所在している。当遺跡の南には板田橋が架けられ、城下に入城する一つの入り口であった。絵図資料等では調査地に武家屋敷等の記載は確認できなかった。

調査前は、延岡藩主であった内藤家の管理事務所兼材木加工工場周辺が建設されており、コンクリート基礎が一面張られている状況であった。

### (2) 調査の概要

調査は重機を使用し、遺構検出と土層観察に主眼をおき実施した。調査地のほぼ全面にコンクリート基礎が張られていたため、影響を受けていない場所に 3 本、基礎を剥がしながら 3 本のトレンチを設定した。

その結果、調査区中央に設定したトレンチから、灰石の石列遺構と張り石の一部が検出された。これは日向興産創業時に使用されていた排水の痕跡と考えられた。トレンチを拡張して調査を行ったが、その他の残存は確認できなかった。

その他のトレンチは予想以上にコンクリート基礎による擾乱が激しく、遺構の検出はできなかつた。

遺物は弥生土器片、須恵器、陶磁器等が出土したが、混在しており、また細片やローリングを受けていたことから、調査地を流れる五ヶ瀬川氾濫時に堆積したものと推察された。

### (3) 検出遺構

最幅 44 cm、長さ 46.3m、深さ 31 cm の石列遺構と付随する張り石を検出。明治期に排水に使用されていたと思われる。また、長さ 3m × 2m、深さ 1.3m の廃棄土坑を検出。紅渓石観の試作品等が廃棄し



Fig.31 北小路遺跡位置図 (1/15,000)

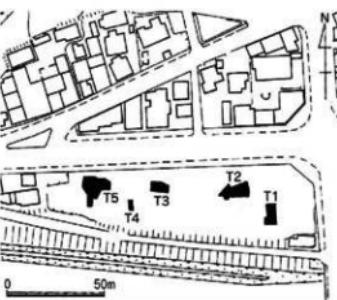


Fig.32 北小路遺跡調査区配置図 (1/2,500)



PL.31 北小路遺跡調査風景

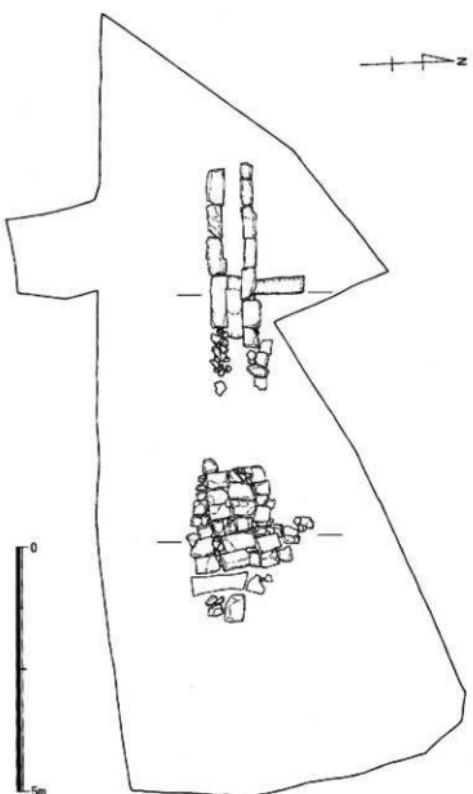


Fig. 33 北小路遺跡排水遺構平面図(1/100)



PL.32 北小路遺跡排水遺構検出状況

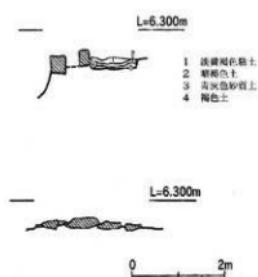


Fig. 34 北小路遺跡排水遺構断面図(1/100)

てあった。土坑底側面には、からみレンガが配してあった。

#### (4) 出土遺物

弥生土器、須恵器、陶磁器等が出土した。混在しており、また細片やローリングを受けていた。1は弥生土器の壺と見られ口縁部のみ残存している。内外面はヨコナナ調整、外面頸部には一部斜めにナデ調整が行われている。外面にススが付着している。2は須恵器の蓋である。内外面に一条の沈線が見られる。内面はナデ、外面はヘラ磨きとナデ調整が施されている。3は須恵器の大甕。外面口縁下に波状文が、内面頸部には敵痕が残る。風化によりはっきりしないが内面ナデ、外面はヘラ磨きとナデ調整である。4は土師器皿で、風化が激しい。ヘラ切り痕が残る。

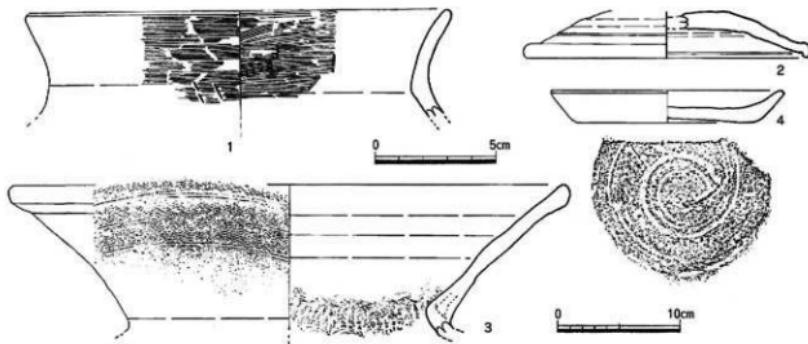
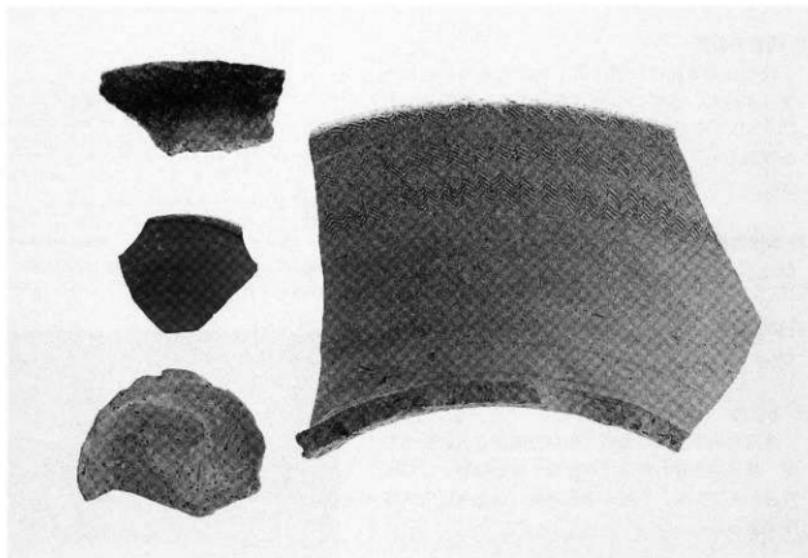


Fig. 35 北小路遺跡出土遺物実測図 (1,2,4=1/2 3=1/4)

### (5) まとめ

江戸期の絵図資料から城内への入り口として、現在と同様に板田橋の高架や主要道路が描かれている。比較すると現在の板田橋よりやや上流に描かれていることが伺えた。そのことから、調査地に遺跡の残存する可能性が考えられた。しかし、調査結果からそれらの痕跡を確認することは出来なかった。絵図に描かれている付近は、現在堤防が築かれ、また一段低い地形に変化している。このように、度重なる土地の改変が行われており、既に破壊を受けている可能性が高いと思われた。



PL.33 北小路遺跡出土遺物

## 5. 下貝遺跡

所在地	延岡市貝の畠町 2210-1 外	調査面積	28.3 m <sup>2</sup>
調査原因	宅地造成	担当者	高浦
調査期間	20010913 ~ 20010921	処置	調査後破壊

### (1) 位置と環境

当遺跡は、市の西部にある岩熊井堰を眼下に望む標高 34m の丘陵に位置する。ここは吉野町から連なる丘陵の最南端にあたる。調査地の周辺はこの岩熊井堰の灌漑によって豊かな水田が営まれている。

この井堰は、牧野貞道が藩主であった亨保 9 年(1742)、家老の藤江監物が郡奉行の江尻喜多右衛門に命じ築かせた井堰である。この土木工事は莫大な費用を要したため、藩の悪行とされ監物と 3 人の息子は捕らえられ、幽閉の後死去した。工事は一時中断したが、江尻がそのあとを継ぎ、亨保 19 年(1752)、10 年の歳月をかけ完成させたものである。現在も下流域には、豊かな水によって多くの水田が営まれている。また同丘陵には、中世に建立されたとされる永楽寺があった。

### (2) 調査の概要

丘陵は調査前に一部土木工事が進められ破壊を受けていた。このことから残存する旧地形 3ヶ所にトレンドを設定した。表土の約 1.5m から、眼下を流れる五ヶ瀬川の氾濫時の河岸段丘礫が確認された。

### (3) 検出遺構

なし。

### (4) 出土遺物

なし。

### (5) まとめ

今回の調査では、埋蔵文化財は確認されなかつたが、調査地を含む丘陵は埋蔵文化財包蔵地として取り扱われており、今後の周辺開発に注意を要する場所である。



Fig.36 下貝遺跡位置図 (1/15,000)

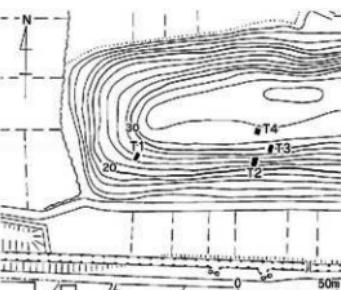


Fig.37 下貝遺跡調査区配置図 (1/2,500)



PL.34 下貝遺跡調査風景

## 6. 黒土田遺跡（第3次）

所在地 延岡市細見町 3261 番地 8  
調査原因 市道改良工事  
調査期間 20010913 ~ 20010927

調査面積 50.0 m<sup>2</sup>  
担当者 山田  
処置 調査後破壊

### （1）位置と環境

本遺跡は、延岡市西部にある標高約40~45mの平坦な丘陵縁辺部に位置し、南側には五ヶ瀬川、西側には細見川が流れている。周辺は、黒土田と呼ばれる黒色上で覆われた地域で、市内でも有数の畑作地帯となっている。また、旧石器～古墳時代にかけての周知の埋蔵文化財包蔵地としても知られ、古墳と考えられる塚が存在していた伝承が残っている。平成5年度には農業基盤整備事業に伴う発掘調査が実施され、ナイフ形石器など旧石器類が検出されたほか、古墳の周溝が確認されている。平成7年度に実施された詳細分布調査では、同丘陵上の南側及び西側から古墳が數基確認されている。

調査地は、同丘陵から細見川に延びる小谷の上部縁辺部に位置し、高千穂往還と呼ばれる旧街道筋に隣接している。現在はルートが変更されて谷筋に市道が通り、水神が祀られる湧水地が存在している。今回の調査は、平成13年9月3日付けで市土木課より市道平田中三輪線改良に伴う「文化財の所在の有無について」の照会によるもので、協議の結果、改良事業の緊急性及び施工時期等の理由から市教委において早急に発掘調査を実施することとなつた。

### （2）調査の概要

調査は、旧地形が残存する区域を対象として全面調査を行った。表土除去後、アカホヤが上部平坦面から検出され、これを遺構検出面とした。遺構検出面上層の2層（黒褐色土）からは、近世～繩文後期にかけての遺物がランダムに検出され、11カ所のピットが確認された。アカホヤ面を掘り下げる調査では、5層（茶褐色粘質土）上面から繩文早期の集石遺構2基を検出し、全掘可能な1基の作図を行つた。遺物は、4層（暗茶褐色粘質土）～5層に



Fig.38 黒土田遺跡（第3次）位置図 (1/15,000)



PL.35 黒土田遺跡（第3次）調査地



PL.36 黒土田遺跡（第3次）表土剥ぎ後

かけては蔽石、磨石、剥片を検出したほか、8層（黄褐色ローム）から礫器を検出した。

### (3) 出土遺構

#### 集石遺構 1

調査区中央東端から検出された。5～10cm程度の河原石を約150個（約40kg）使用して直径約90cmの範囲に折り重なるように敷き詰められていた。その多くは受熱による赤化及び破碎が認められ、周囲にはその破碎片がみられた。また、全面に配石を有し、長径0.9m×短径0.8m深さ0.2mの掘込みが確認された。配石は阿蘇溶結凝灰岩製で、板状に粗割された約30個（約34kg）が敷き詰められ、受熱による赤～黄色化及び風化が認められた。

#### 集石遺構 2

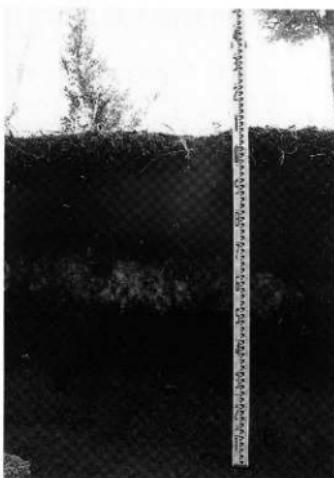
集石遺構1の北東方向に隣接し、調査区端部にあたるため全容は不明である。5～10cmの河原石が認められた。

#### ピット群

アカホヤ面検出段階において、調査区中央付近を中心で確認された。直径約0.3～0.4m、深さ約0.2～0.4mが大半を占めるが、掘立柱建物跡になるものは確認されていない。

### (4) 出土遺物

1～5は旧石器である。1は蔽石である。縦長の流紋岩を素材とし、両端部には蔽打による剥離が認められる。2は剥片である。流紋岩の転盤から自然面除去のため剥離されたものである。裏面には、同様の剥片作出を試みた小剝離が多数認められる。3は、石核である。剥片を素材とし、裏面には自然面が一部残っている。主に裏面を打面として剥片剥離を行っている。石材は、白色系の流紋岩を利用している。4は礫器である。やや扁平な縦長転盤を素材とし、短側辺の一方から剥離作業を行い刃部を作出している。石材は流紋岩である。5は、二次加工剥片である。欠損面があり遺物としての取り扱いが微



PL.37 黒土田遺跡(第3次) 土層断面

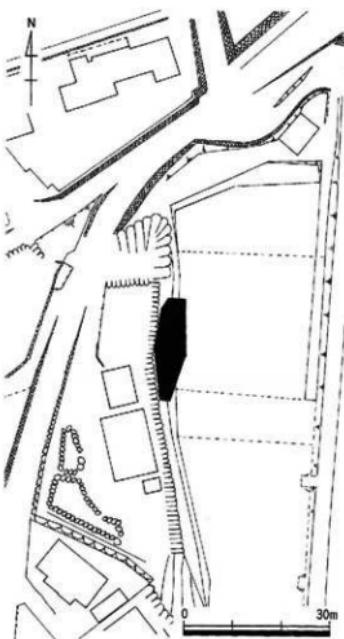


Fig.39 黒土田遺跡(第3次) 調査区配置図 (1/1,000)

妙であるが、地山に存在しない石材（頁岩）であることから掲載した。6は磨石である。五ヶ瀬川の転砾でもある砾岩を素材としている。7は磨石である。縱長の砂岩を素材とし、ほぼ全方位にわたって使用痕が認められ、一面には敲打に伴う凹面が認められる。8は磨石である。祖母・傾山系のデイサイトで質量が大きく、片面には全て滑面が認められる。9は磨石である。平面形は三角形を呈し、一面は全て滑面となっている。10・11は、磨消繩文系土器である。12は、須恵器の瓶である。13は、須恵器の大甕である。内面には同心円文当て具痕がみられる。14は、肥前磁器の染付碗である。15は、肥前磁器の染付碗である。外面口縁部に雨降文が施されている。



PL.38 黒土田遺跡 (第3次) 邊構検出状況



PL.39 黒土田遺跡 (第3次) 調査風景

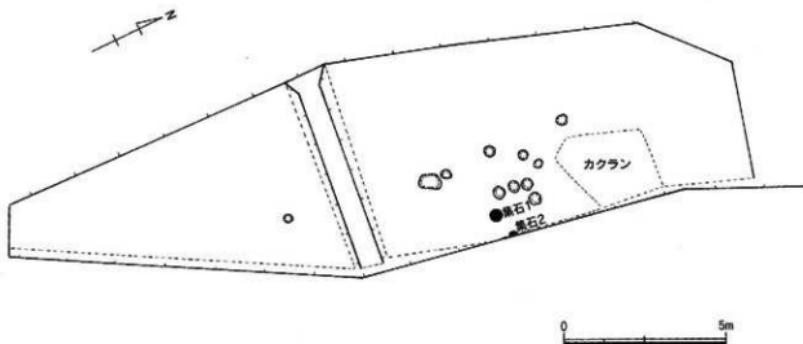


Fig.40 黒土田遺跡 (第3次) 検出邊構分布図 (1/150)

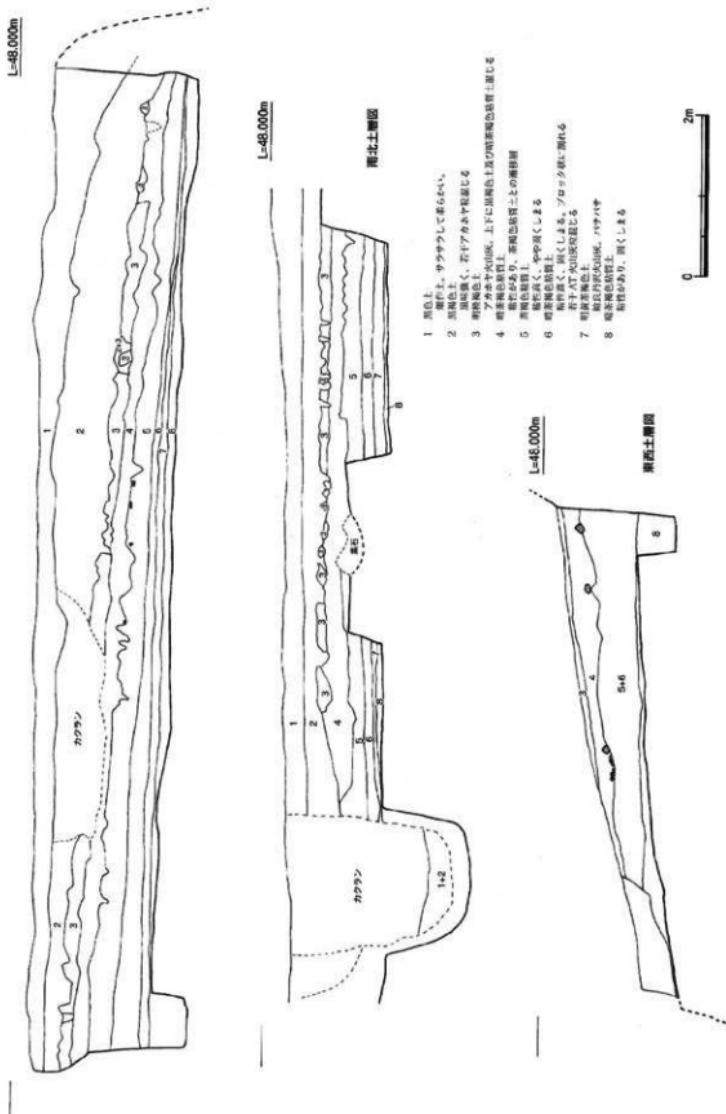


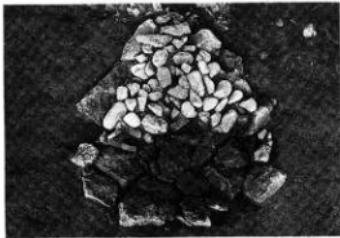
Fig.41 黒土田遺跡(第3次) 土層断面図 (1/60)

### (5)まとめ

今回の調査は小規模なものであったが、近世から旧石器に至る遺物検出や縄文早期の集石遺構検出など、黒土田遺跡の複合遺跡としての重要性を垣間みられる成果が得られた。今後予想される各種事業の把握に努めるとともに遺跡の全容解明が待たれよう。



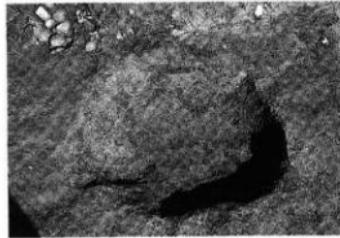
PL.40 黒土田遺跡(第3次)集石遺構検出状況



PL.41 黒土田遺跡(第3次)集石遺構半碎状況



PL.42 黒土田遺跡(第3次)集石遺構配石検出状況



PL.43 黒土田遺跡(第3次)集石遺構完掘状況

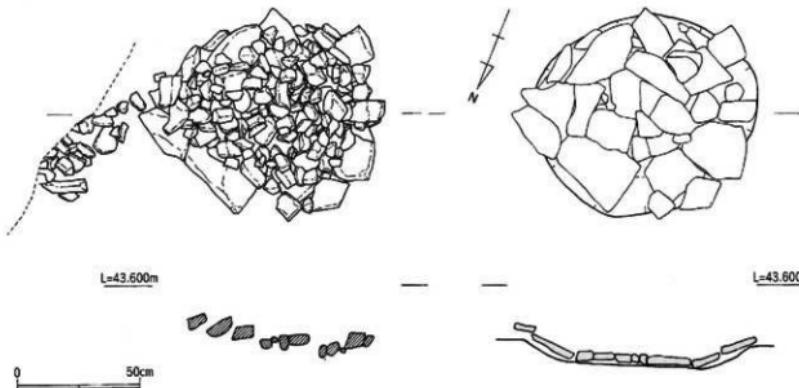


Fig.42 黒土田遺跡(第3次)集石遺構1実測図(1/20)



Fig.43 黑土田遺跡(第3次)出土遺物実測図1 石器(1/3)

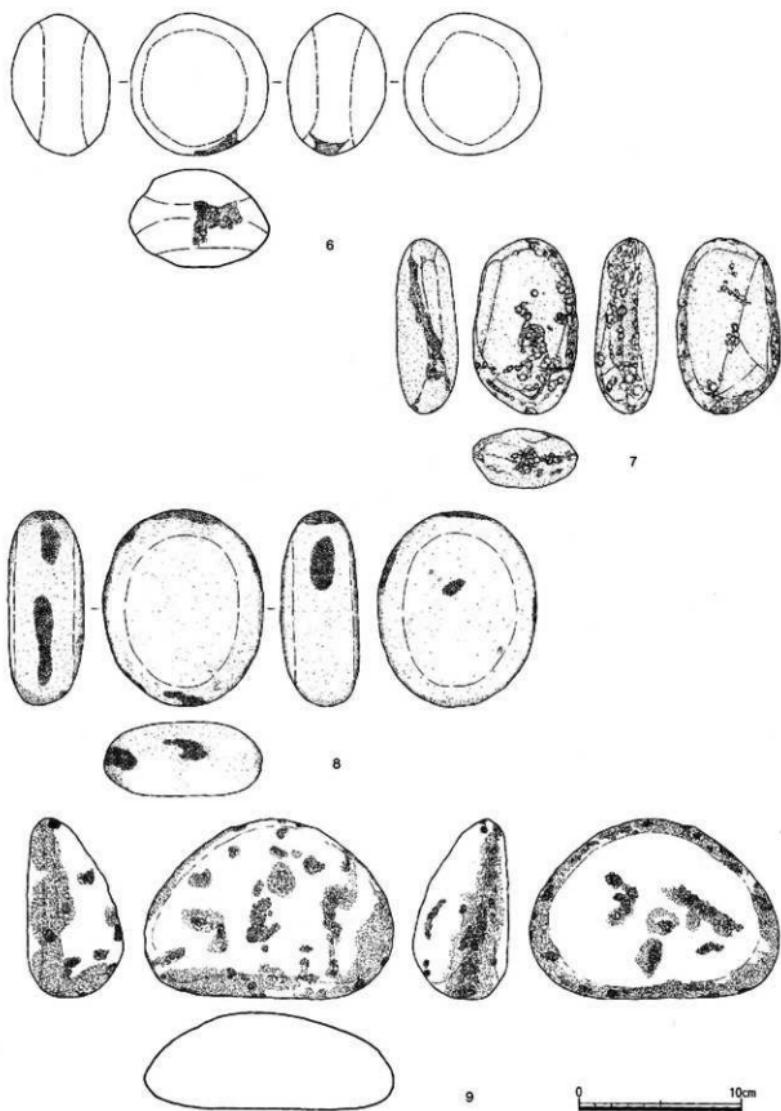
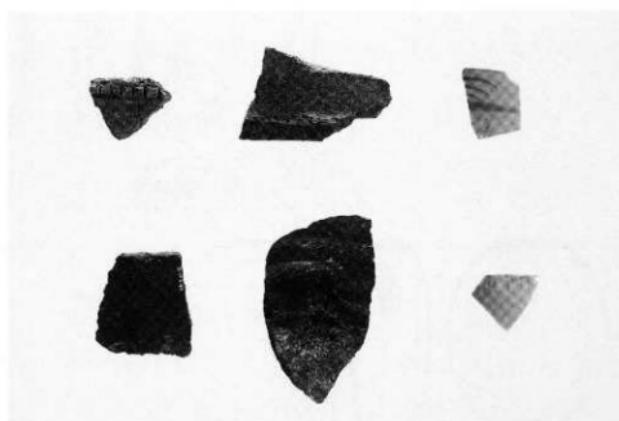


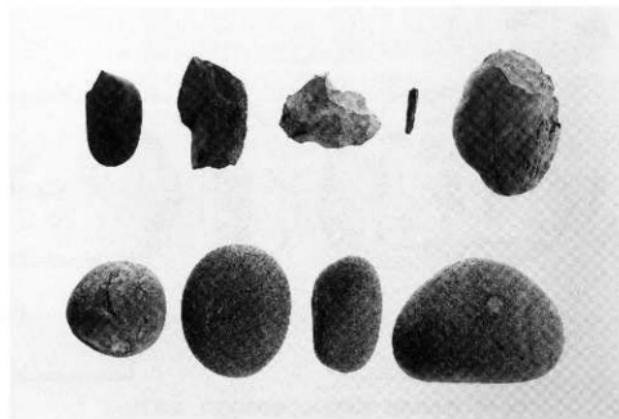
Fig.44 黑土田遺跡(第3次)出土遺物実測図2 石器(1/3)

Nº	図面番号	出土層位	器種	石 材	長 さ	幅	厚 さ	重量(㌘)	備 考
26	1	5層	砾石	流紋岩	8.6	4.9	3.0	172.5	
51	2	5層上	剥片	流紋岩	9.3	8.0	2.5	177.5	
32	3	5層	石核	流紋岩	6.9	9.0	3.3	182.5	
56	4	7層	礫器	流紋岩	13.2	9.6	4.0	800.0	
42	5	5層	二次加工剥片	頁岩	4.2	0.9	0.7	5.0	
52	6	5層上	磨石	砂岩	8.7	6.0	6.0	900.0	
41	7	5層上	砾石	砂岩	10.8	6.3	3.8	335.0	
9	8	5層	磨石	ディサイト	12.0	9.7	4.8	1000.0	
39	9	5層上	砾石	砂岩	11.0	15.4	5.8	1500.0	
40		5層上	磨石	花崗斑岩	8.5	3.9	4.0	500.0	摩滅激しい

表 5 表 黒土田遺跡(第3次)出土遺物観察表 石器



PL.44 黒土田遺跡(第3次)出土遺物1



PL.45 黒土田遺跡(第3次)出土遺物2

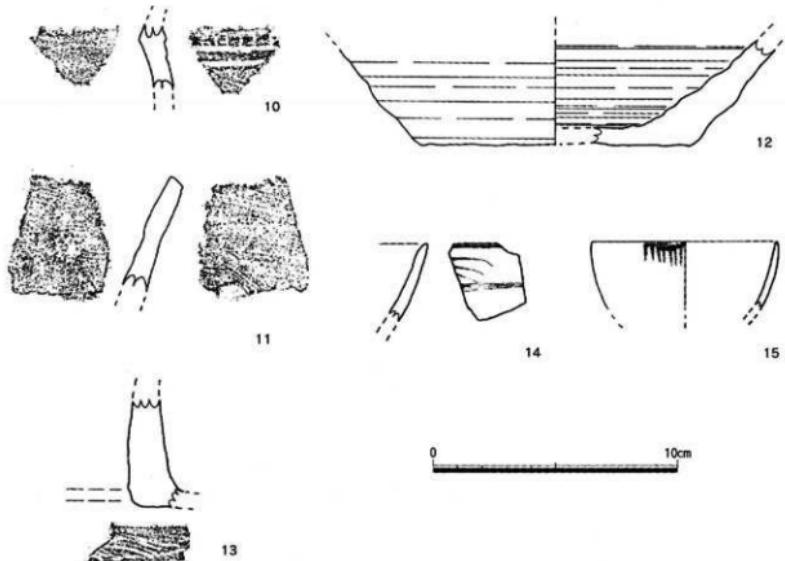


Fig.45 黒土田遺跡(第3次)出土遺物実測図3 土器・須恵器・磁器(1/2)

No.	圓面番号	種別	器種	出土層位	法量	文様・調整		色調		備考
						外面	内面	外面	内面	
28	10	圓文土器	深鉢	2層			1.1 沈羅文・刺突文	ナデ	淡赤褐色 淡赤褐色	
25	11	圓文土器	深鉢	2層			1.1 ヘラチテ	ナデ	暗赤褐色 淡赤褐色	
15	12	須恵器	大甕	2層	11.0	1.7 ヘラケズリ 後ナデ	ナデ	青灰色 青灰色	青灰色	
10	13	須恵器	大甕	2層		2	ナデ	同心円文当 て長横	淡青褐色 青灰色	
31	14	磁器	染付窓	2層			草花文		淡灰白色 淡灰白色	肥前 18~19世紀
-45	15	磁器	染付窓	1~3層	7.5	雨附文			淡灰白色 淡灰白色	肥前 18~19世紀
1	須恵器	大甕	2層		0.9	ヘラケズリ 後ナデ	淡茶褐色 青灰色			
2	赤生土器	甕	2層		1			淡模白色	淡模白色	
4	繩文土器	深鉢	2層		0.6	ナデ	淡黑褐色	暗赤褐色	外腹ス付着	
5	赤生土器	甕	2層		0.9	ナデ	淡模白色	淡黑褐色	内腹ス付着	
6	繩文土器	深鉢	2層		0.9	ナデ	暗赤褐色	暗赤褐色		
8	陶器	火入?	2層			鉄輪	鉄輪	暗黒茶褐色	暗黒茶褐色	
12	陶器	瓶?	2層			鉄輪	無輪	暗褐色	灰色	
14	陶器	火鉢?	2層			丸に四菱文		暗赤褐色	暗赤褐色	
17	磁器	青磁火入	2層					淡青褐色	淡青褐色	口縁部のみ
21	繩文土器	深鉢	2層		0.7	ナデ	淡赤褐色	淡赤褐色		
23	繩文土器	深鉢	2層		0.8	ヘラナデ	ナデ	淡赤褐色	淡黑褐色	内腹ス付着
29	須恵器	大甕	2層		1.4	ヘラケズリ	ナデ	青灰色	青灰色	
30	磁器	染付窓	2層					淡青白色	淡青白色	
50	繩文土器	深鉢	2層		0.8	ナデ	ナデ	淡赤褐色	淡赤褐色	

表6表 黒土田遺跡(第3次)出土遺物観察表 土器・須恵器・陶磁器

## 7. 黒土田遺跡(第4次)

所在地 延岡市細見町 3033-2  
調査原因 個人住宅建設  
調査期間 2002年8月19日～2002年8月27日

調査面積 40.0 m<sup>2</sup>  
担当者 尾方  
処置 一部破壊

### (1) 位置と環境

当遺跡は市の西部に位置し、大きく広がる台地が南に突き出したその先端部にある。ここは標高約32mを測り、南の眼下には国道218号線が走り、その南には五ヶ瀬川が西から東に流れている。当遺跡の北にはTR高千穂鉄道が走り、以前は連続した台地であったが、現在は分断され東西に細長い独立した地形を呈している。

周辺の遺跡としては、今回の調査地である同一の台地の西端に2～3基の古墳（細見古墳）が確認されている。また北に大きく広がる台地は、平成5年～6年にかけて農業基盤整備事業に伴う発掘調査が実施されている。この調査では旧石器時代の集石遺構や弥生時代の住居址、古墳の周溝が検出され、またそれらの時代の遺物が多数出土している。この他、台地の西端では道路改良工事に伴う調査が実施され、縄文早期の集石遺構や遺物が検出されている。現在、この台地は複合遺跡が残存する場所として認知され、周知の埋蔵文化財包蔵地として取り扱われている。

今回の調査地もこの台地と同一のものであり、また立地的にも絶好の地点に位置することから、これまでの周辺調査と同様に多期にわたる遺跡の存在が予想された。

### (2) 調査の概要

調査はトレンチ法を採用し、土層観察と遺構検出に主眼をおき人力により掘り下げていった。調査は、工事計画により切り土が実施される地点に7本のトレンチを設定したが、ここは栗の栽培により植林されていたため、調査地がやや限定された。

調査の結果、各トレンチからこれまでの周辺調査と同様の良好な土層堆積状況を確認した。調査地の基本層序は①層耕作土、②層黄褐色土（アカホヤ）、③層黒褐色土、④層暗褐色粘質土、⑤層茶褐色土、⑥層暗茶褐色土（上位白斑ローム）、⑦層黒褐色土



Fig.46 黒土田遺跡(第4次)位置図(1/15,000)

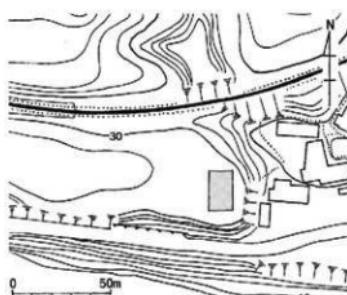


Fig.47 黒土田遺跡(第4次)調査区位置図(1/2,500)



PL.46 黒土田遺跡(第4次)土層堆積状況

(A T の粒子混入)である。

各トレンチの①層～⑤層にかけて、少量ではあるが縄文土器や石鏃、旧石器時代の石器が出土した。しかし、遺構の存在は確認することが出来なかつた。

### (3) 掘出遺構

なし。

### (4) 出土遺物

縄文時代

1～10はいずれも深鉢と見られる。1～4は外面に沈線による区画内に縄文を施している。5は外面に沈線のみ見られる。6は外面の口縁下に貝殻による刺突痕が施されている。口唇部には沈線が巡る。7はやや大きめの横円文が縱方向に施されている。8～10は内外面に貝殻条痕が施されている。いずれの上器も細片化が著しい。

11、12はチャート製の石鏃である。11は小型ではあるが、やや肉厚である。12は欠損している。13は流紋岩製、14は凝灰岩製の石斧である。2点ともレキ面を残し、交互は剥離により刃部を形成している。13は下部が欠損している。15は砂岩製の石鎌である。横円形のレキの長軸の両端に加工を施している。

旧石器時代

16は流紋岩製の細石刃である。やや大型で、打面が残る。17は流紋岩製のナイフ形石器である。横長の剥片を素材とし、主要剥離面及び背面より加工を施している。下部が欠損している。18は流紋岩製の三棱尖頭器である。不定形の剥片を素材とし、主要剥離面及び後から加工が施されている。19、20はスクレイパーである。19は頁岩製で一部レキ面が残る。左側縁は主に主要剥離面から加工を施している。右側縁はレキ面から加工を施し刃部を形成する。20は流紋岩製で打面が残る。側縁に主要剥離面より加工を施し刃部を形成する。21は安山岩製の礫器でレキ面を多く残す。主要剥離面より加工を施し、粗い刃部を形成する。22はホルンフェルス製の礫石である。底部に敲打痕が残る。

### (5) まとめ

今回の調査では遺構の存在は確認されなかつたが、非常に良好な土層堆積状況を確認することができた。また、少量ではあるが遺物の出土も認められた。この結果から、北に展開する黒土田遺跡の範囲は当地まで含まれるものと判断された。

今回の調査から、旧石器時代の遺構・遺物の存在が考えられるが、工事による切り上深が旧石器時代の層に影響がないことから、今回は試掘のみとした。今後も当地から西及び北の台地上は数多くの遺跡が存在することが明らかとなるため注意を要する地点である。

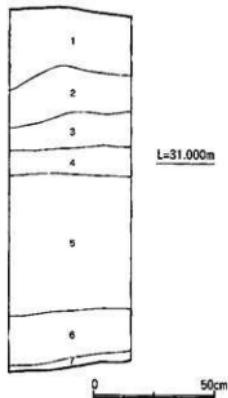




Fig.49 黒土田遺跡(第4次)出土遺物実測図1 (1/2)

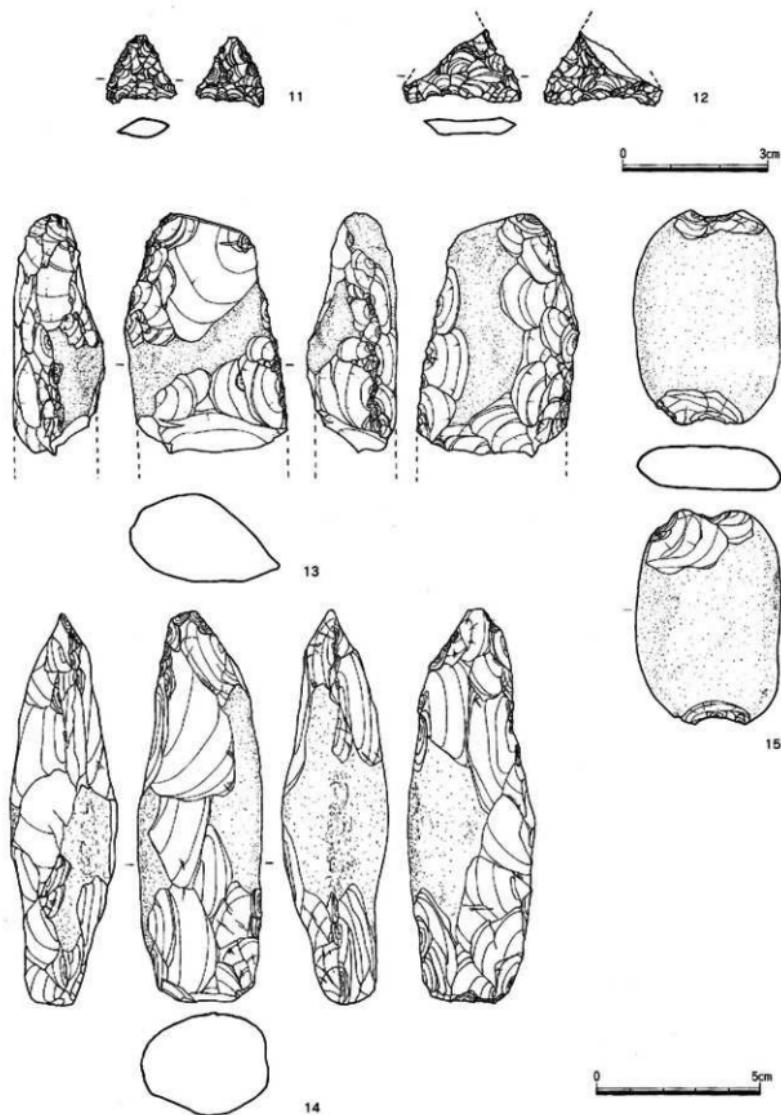


Fig.50 黒土田遺跡(第4次)出土遺物実測図2 (11,12=1/1 13,14,15=2/3)

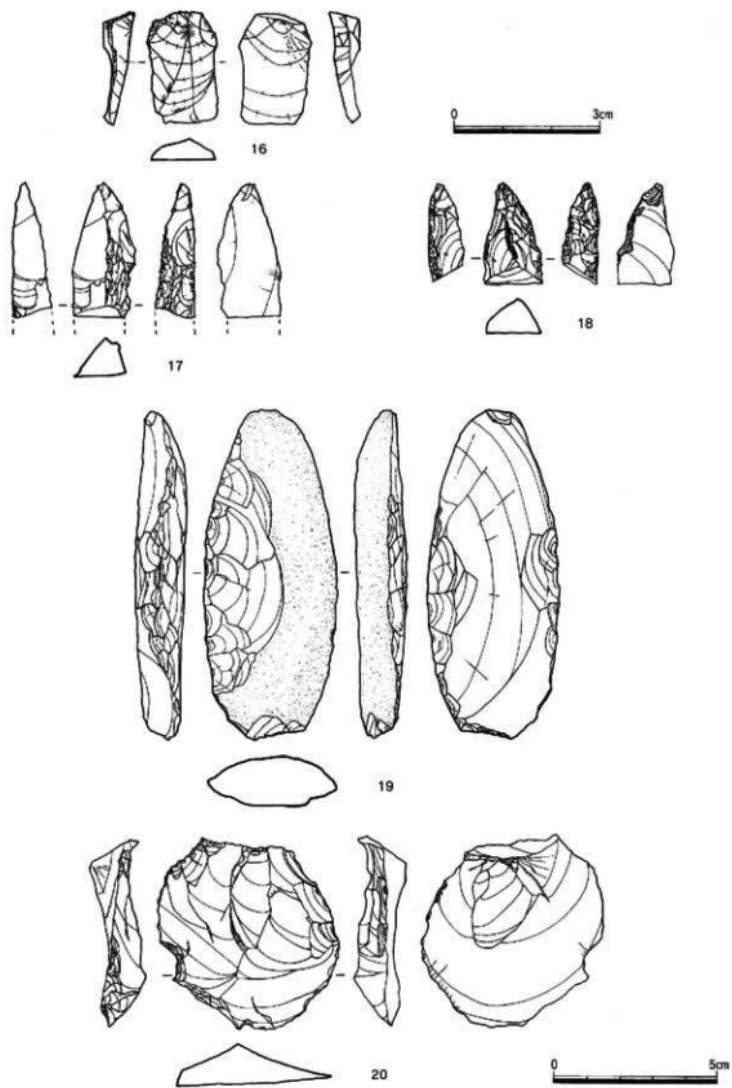
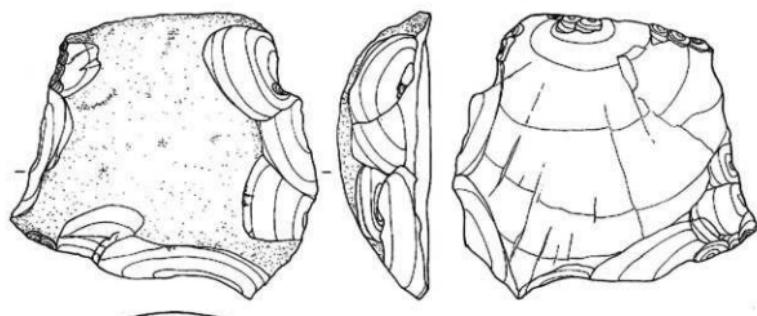
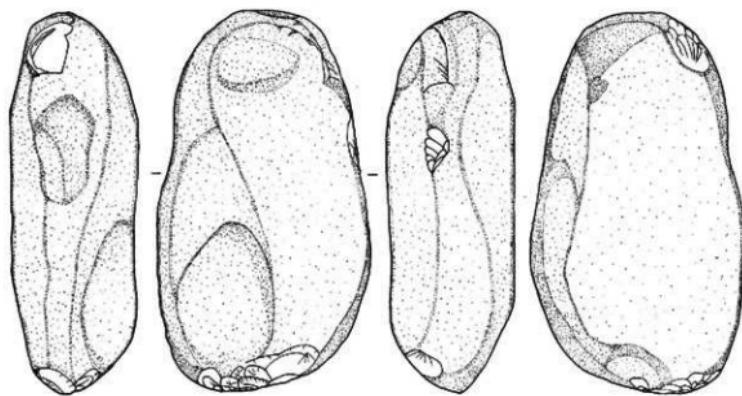


Fig.51 黑土田遺跡(第4次)出土遺物実測図3 (16=1/1 17,18,19,20=2/3)



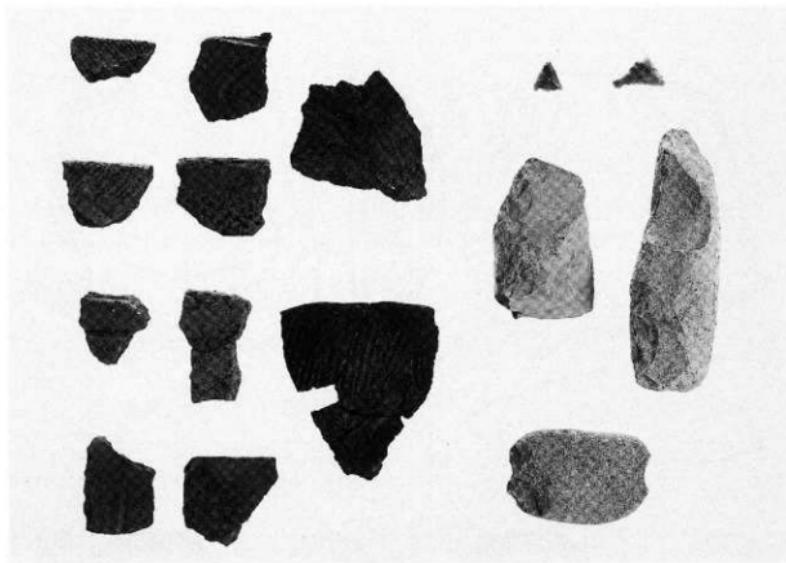
21



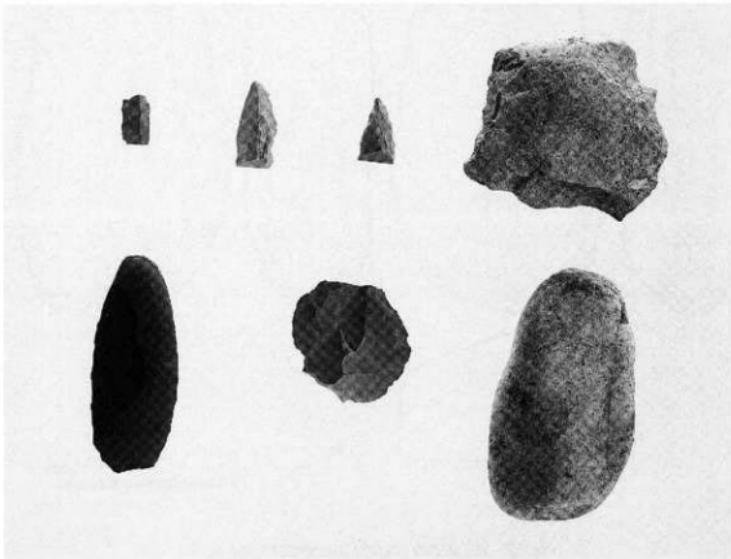
22

0 5cm

Fig.52 黒土田遺跡(第4次)出土遺物実測図4 (2/3)



PL.47 黑土田遺跡(第4次)出土遺物1



PL.48 黑土田遺跡(第4次)出土遺物2

## 8. 延岡城内遺跡（第9次）

所在地 延岡市本小路 85 外  
調査原因 道路改良工事  
調査期間 20020819 ~ 20020905

調査面積 115.5 m<sup>2</sup>  
担当者 高浦  
処置 保存

### (1) 位置と環境

延岡城は市街地のほぼ中央部に位置し、市内を流れる五ヶ瀬川及び大瀬川を天然の外堀としている。その中州にある標高約 53.4m の独立丘陵という天然の要害に、天守台、本丸、二ノ丸、三ノ丸を築き本城としている。また西には、西の丸御殿跡（現内藤記念館）があり、この二柳から延岡城は成っている。築城は当時の藩主高橋元種によって、1601 年から 3 年かけて行われ県内を代表する近世城郭となっている。

今回の調査地は、平成 11 年度から平成 13 年度に実施した本小路通線道路改良工事に隣接する地点にあたる。平成 12 年度に実施した 5 次調査では、絵図史料を裏付けるように五ヶ瀬川から本城下に続く内堀跡の一部が検出されている。

この堀は五ヶ瀬川から南へ延び、本小路通線下を阿蘇溶結凝灰岩を石組みし暗渠として通し、そこから「L 字」に曲がり西へ延び、その後南へ折れ城下の堀へ続くものである。5 次調査から、堀は五ヶ瀬川からの「L 字」部及びその周辺のみ石垣で築かれていたが、そのほとんどは素堀のものであることが確認されている。

本小路通線は延岡城下にあたり、また一般国道 10 号延岡道路延岡インターチェンジから市街地へのアクセス道路と主要な幹線道路となることから、平成 14 年度、学識者・市民代表から構成される「本小路通線景観検討会議」が設置された。その会議の中で 5 次調査で検出された内堀の整備が検討された。

その結果を受け、担当課である街路公園課と協議を進め、まずは内堀の全容を明らかにすることとなつた。調査地は 5 次調査の結果や絵図史料をもとに、内堀の規模・構造が把握でき、なおかつ調査可能な場所を選定し調査を実施した。

### (2) 調査の概要

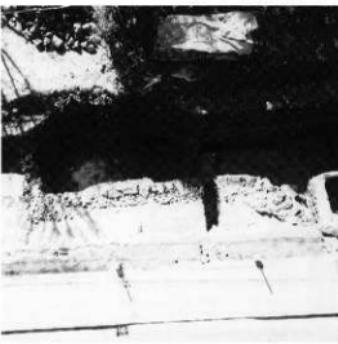
平成 12 年度調査では、内堀の北側部が検出され



Fig.53 延岡城内遺跡（第9次）位置図 (1/15,000)



PL.49 日向国延岡城石垣築直堀浚之覚 (寛延3年)  
明治大学刑事博物館所蔵



PL.50 延岡城内遺跡（第5次）検出内堀空中写真

ている。内堀の一部は石垣を伴う構造であった。内堀は江戸中期頃描かれた絵図史料から堀幅四間半と記載があるため、調査地を現在市民花壇として活用されている地点、旧延岡宮林署跡地、市民公園の3ヶ所に、計5本のトレーンチを設定した。5次調査で検出された石垣レベルを参考とし、その直上まで重機で掘り下げ、その後は手掘で実施した。調査地は昭和初期から30年代に埋土の骨材として用いられた石炭ガラが約2mも埋められており、壁面が軟弱で崩落が危惧され大変危険なものであった。

調査の結果、市民花壇に設置したトレーンチ2から堀肩及び掘り込みが検出された。5次調査結果と検証すると、調査地付近の堀は北側同様素堀の構造と確定された。堀幅については約13mを測り、絵図との相違が確認された。トレーンチ1からも堀内の埋土と見られる暗青灰褐色の土が確認され、斜めに落ちる掘り込みが検出された。しかし堀肩の検出はコンクリート擁壁が妨げとなり確認できなかつた。

トレーンチ3は宮林署官舎跡地に設定した。この南側部は石垣の堀が確認されており、当地も同様に石垣が検出されるものと期待していた。しかし堀内の埋土と見られる青灰褐色粘質土は検出したものの、石垣等堀幅を決定付ける結果は得られなかつた。

トレーンチ4は市民公園に設定した。ここでは5次調査とほぼ同レベルで石垣を検出することができた。精査したところ東西にのびる堀の東角にあたることが確認された。石垣は阿蘇溶結凝灰岩を用い、3段築かれていた。また、堀の南側は石垣を伴わない素堀の構造であることも合わせて確認することができた。ここでも5次調査の結果と検証すると堀幅は約10mを測り、絵図との相違が見られた。

トレーンチ2とトレーンチ4の結果から、堀南側は素堀の構造と判断され、これは城内外という堀の防御的な役割、また水流が変化する地点であることから北堀壁及び東堀壁のみ石垣を築き堅固なものにしたのではないかと考えられた。

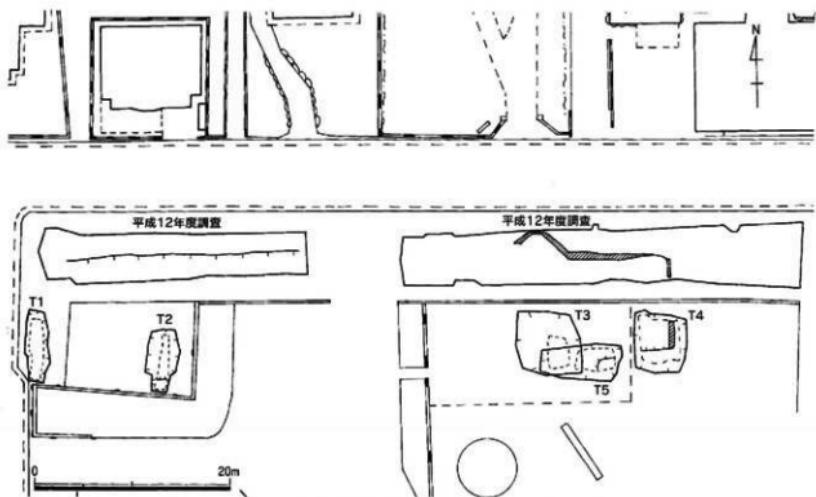


Fig.54 延岡城内遺跡(第9次) 調査区配置図(1/500)

トレンチ 2 とトレンチ 4 を結んだ直線上にトレンチ 3 は設定していたが、前述のようにトレンチ 3 からは堀幅を決定できる資料が得られなかった。このためトレンチ 4 で検出した南側の堀ライン上を追う形でトレンチ 3 付近を再度調査した（トレンチ 5）。

その結果、トレンチの東端から約 1.7m 西の地点で東西に延びる堀ラインが南へ湾曲していることが確認できた。さらにトレンチ 5 を南へ延ばし、堀肩の検出を試みたが、地形的なものや構造物から確認するには至らなかった。

### （3）検出遺構

内堀跡を検出した。トレンチ 2 付近は素堀で、5 次調査と検証すると堀幅約 13m を測る。トレンチ 4 では東側のみ石垣を伴い、南側は素堀であることが確認された。石垣は阿蘇溶結凝灰岩を用い、3 段築かれていた。今回は 2.9m を検出し、5 次調査と検証すると内堀東隅の堀幅は約 10m を測る。トレンチ 5 の結果から、堀は直線でトレンチ 2 方向にのびるのではなく、東隅から西に 7.2m の地点で南に湾曲し、堀幅が広がることが確認された。

この他、トレンチ 2 の堀肩から堀に伴う杭痕 1 が、トレンチ 4 の石垣検出面から柱穴 1、不明土坑 1 が検出された。

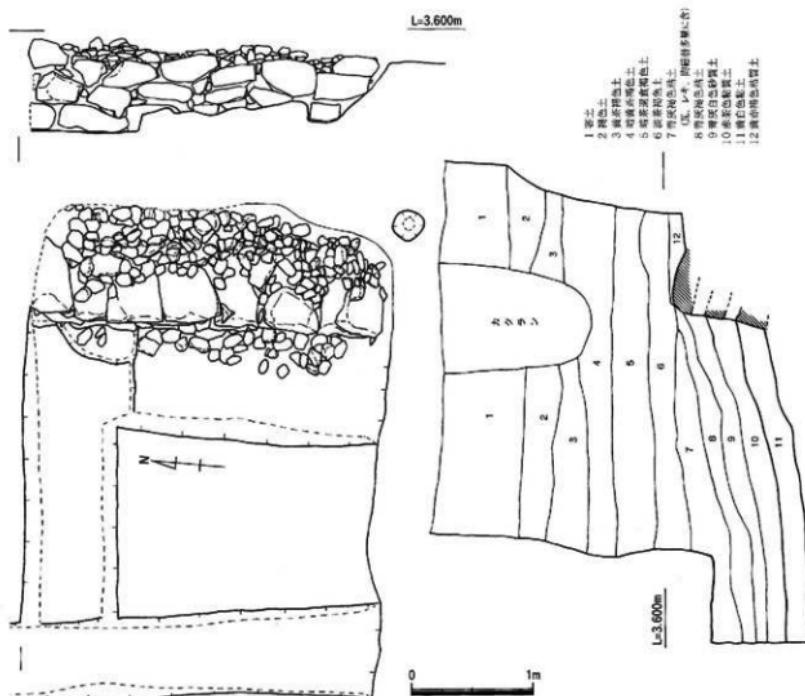


Fig.55 延岡城内遺跡（第9次）T4検出内堀実測図（1/40）

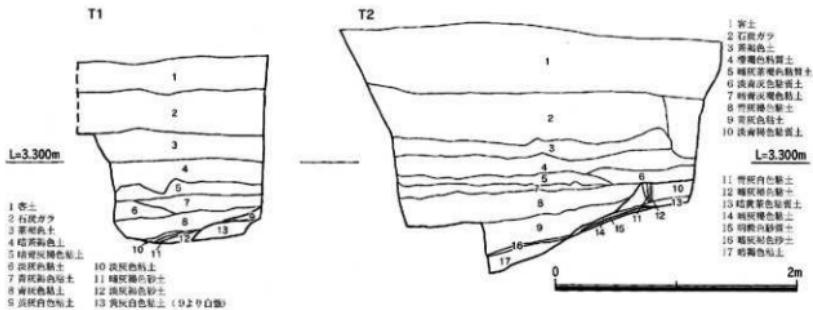
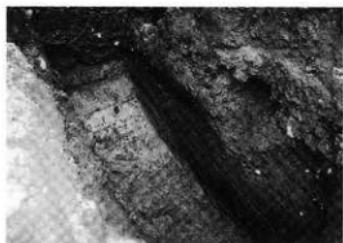


Fig.56 延岡城内遺跡(第9次) T1・T2 東壁土層断面図(1/40)



PL.51 延岡城内遺跡(第9次) トレンチ1土層断面



PL.52 延岡城内遺跡(第9次) トレンチ2土層断面



PL.53 延岡城内遺跡(第9次) トレンチ4石垣検出状況



PL.54 延岡城内遺跡(第9次) トレンチ5内堀検出状況

#### (4) 出土遺物

各トレンチから陶磁器片、瓦片が出土したが、堀外埋土中からの出土が多数を占め、堀内からは若干の出土量であった。

1～4はトレンチ1の堀外埋土からの出土遺物である。1は18C後の肥前の染付皿である。口縁に波涛文様を施す。2、3は18C後の肥前波佐見系の染付碗である。2は梅樹文様?が、3は雪輪と梅樹文様を施す。4は1740～1760年代の肥前の染付皿である。唐草文様を施す。

5～8はトレンチ3の堀外埋土からの出土遺物である。5は18C末～19C前の肥前系の染付皿で鳥絵文様を施す。6は1820～1860年代の肥前系の染付鉢で花唐草文様を施す。7は18C後の肥前の染付皿で口縁部に輪花、牡丹文様を施す。8は陶器の呉器手形碗である。17Cの肥前のものである。

9～13はトレンチ4の堀内埋土からの出土遺物である。9は陶器の甕である。10は19C前の中西系の碗である。11は18C後の肥前系の染付碗で雪輪と梅竹文様を施す。12は1770～1790年代の肥前有田の染付大皿で山水文様を施す。13は陶器の捕鉢である。

14～16はトレンチ5の堀内埋土からの出土遺物である。14は陶器の灯明皿である。19Cの中西系のもので、口縁に油煙が付着している。15は1630～1640年代の肥前の染付瓶で葡萄文様を施す。16は陶器の呉器手碗である。1610～1650年代の肥前のものである。

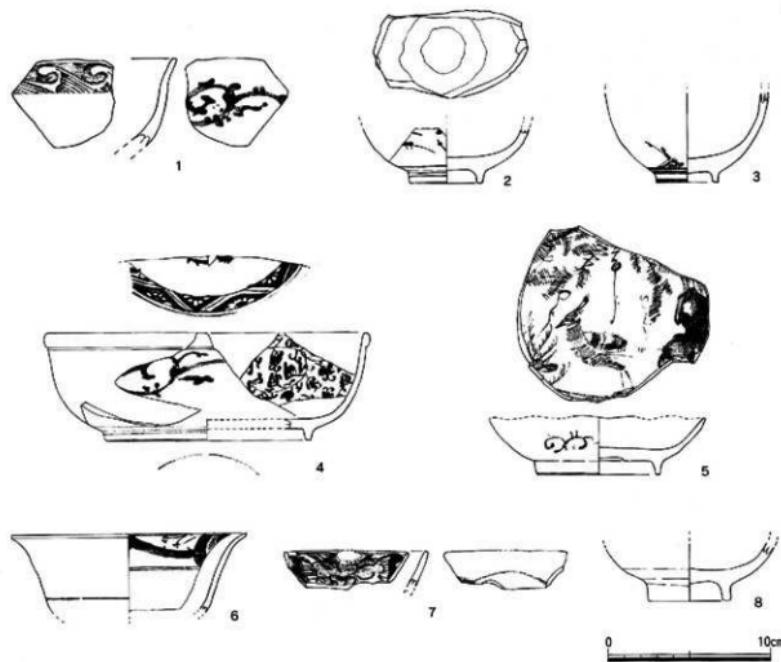


Fig.57 延岡城内遺跡(第9次)出土遺物実測図1(1/3)

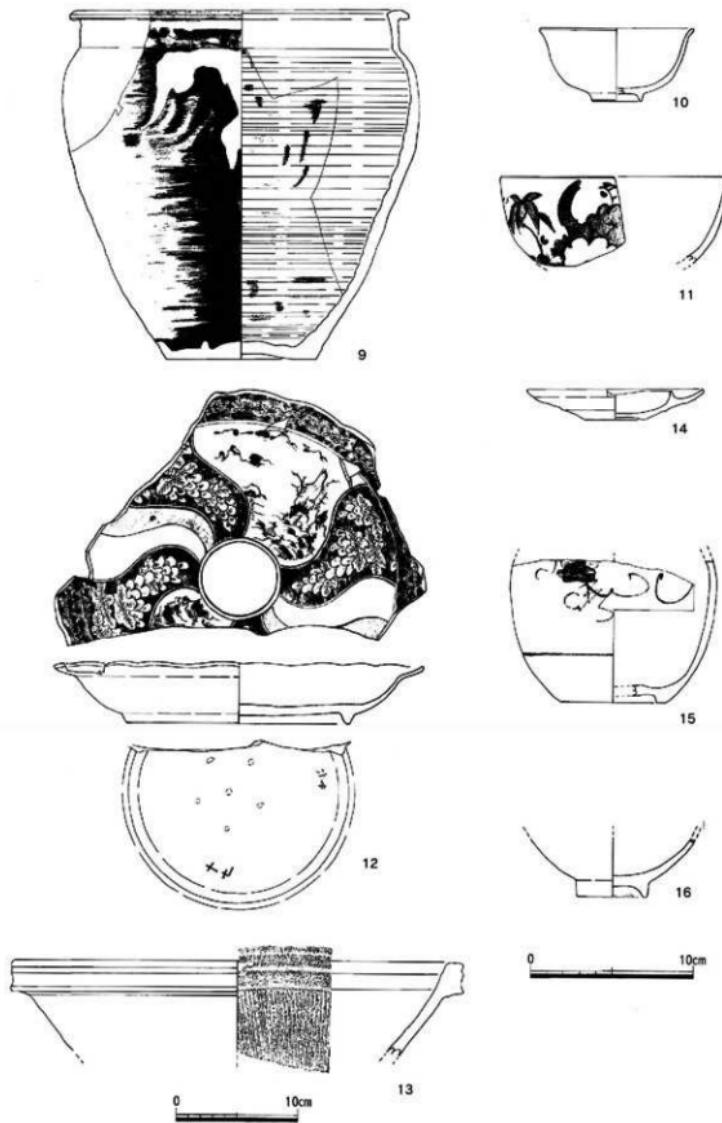


Fig.58 蓬岡城内遺跡(第9次)出土遺物実測図2 (9,12,13=1/4 10,11,14,15,16=1/3)

## (5)まとめ

今回の調査から、5次調査で検出された内堀の南側及び東側の石垣が検出された。東側は石垣を伴う堀で、5次調査で確認されたものと同様のものであった。また、南側は素堀の構造で、東の石垣から約7.2mの地点で南に湾曲し堀幅が拡がることが確認された。今回の調査と5次調査の結果とを検証すると、堀幅はトレンチ2付近で約13m、トレンチ4付近で約10mを測り、絵図との相違がみられた。また、5次調査では検出遺構の分析結果から2期にわたる内堀であったことが考えられているが<sup>5</sup>、今回の調査においても、2期にわたるとみられる堀内の埋土状況を確認した。

今回の調査は、本小路通線景観検討委員会で出された内堀整備に伴うもので、非常に緊急的なものであった。このため調査箇所は限られ、また、予算的にも非常に厳しい調査であった。出来ることならば調査区の全面発掘調査を実施し、正確な内堀の構造、性格を解明したかったと実感した。

No.	種別	器種	出土地点	法 量			形態及び文様	備 考
				口径・長	底径・幅	高・厚		
1	磁器	染付皿	T-1・堀外埋土				口縁部に波涛文様、裏反	18C後、肥前
2	磁器	染付碗	T-1・堀外埋土		4.4		見込み蛇ノ目強刺ぎ、梅樹文様?	18C後、肥前(波佐見系)
3	磁器	染付碗	T-1・堀外埋土		3.8		雪輪と梅樹文様	18C後、肥前(波佐見系)
4	磁器	染付皿	T-1・堀外埋土	26.2	16.5	8.7	唐草文様	1740~1760代、肥前
5	磁器	染付皿	T-3・堀外埋土	(13.2)	7.5	3.6	型打成形、鳥紋文様、蛇ノ目高台	18C末~19C前、肥前系
6	磁器	染付鉢	T-3・堀外埋土	14.4			花唐草文様	1820~1860代、肥前系
7	磁器	染付皿	T-3・堀外埋土				牡丹文様、口縁部に輪花	18C後、肥前
8	陶器	碗	T-3・堀外埋土		4.9		貝器手形、卯色の施釉、貫入	17C、肥前
9	陶器	甕	T-4・堀内埋土	26.8	12.2	28.7		
10	磁器	碗	T-4・堀内埋土	9.4	3.0	4.5	裏反、貫入	19C前、関西系
11	磁器	染付碗	T-4・堀内埋土	14.0			雪輪と梅竹文様	18C後、肥前系
12	磁器	染付大皿	T-4・堀内埋土	(30.0)	18.0	4.75	山水文様、焼繼、型打成形	1770~1790代、肥前(有田)
13	陶器	稻鉢	T-4・堀内埋土	35.0				18~19C、備前系か在埴
14	陶器	燈明皿	T-5・堀内埋土	10.6	3.7	1.9	貫入、口縁に油煙付着	19C、関西系
15	磁器	染付瓶	T-5・堀内埋土		6.3		網目文様	1630~1640代、肥前
16	陶器	甕	T-5・堀内埋土		4.2		貝器手形、灰釉、貫入	1610~1650代、肥前

第7表 延岡城内遺跡(第9次)出土遺物観察表